

平和を考える「小中学生作文集 第29集」

<中学生>

平和の象徴

第一中学校

2年

久保田 成 美

平和とはどんなだろうか
平和とはどんなものだろうか
小鳥の声が聞こえるとき
誰も悲しむことがなくなったとき
花がきれいに咲いたとき
誰も死にたいと思わなくなったとき
どれも平和そのものだ
人により考え方が違うのはあたりまえのことだ
ドーンドーン
銃声が鳴り響き海や大地が消えていく
メラメラドカーン
爆弾をいくつも落とされ何もかもが燃えて消え去ってゆく
家も動物も学校も国旗も人の命も
何もなかったかのように消えていく
「助けて!」「早く逃げて!」
人々は逃げてゆく
でも爆弾は追いかけてくる
そして最後に待ち構えていたのは死
どの人間も必ず通らなければいけない道
そして何よりも恐れていること
爆弾から逃げる罪のない人たちには死がゆっくりと近づいてきていた
そんな日々が何日も続いた
こんな日々が続いた
そして、平和宣言ができた
しかし宣言ができたからといって世界が平和になるとは限らない
今、生きている人たちの思いで世界が変わるのだ
人の命や海や大地を滅ぼしこれが平和と言えるだろうか
戦争は人や世界を死へと向かわせるもの

二度とこんな悲劇をくり返さないために
私達人間に何かできることはないのだろうか

ぼくたちの平和

第二中学校

1年

貝原優輝

原爆ドームの前に立った時
黒く焦げた骨組みの向こうに
8月6日朝8時15分の
空が見えた気がした。
おだやかに流れる元安川の中に
火だるまになり水を求めて
飛びこむ人の姿が見えた気がした。

ぼくが一番ショックだったのは
ぼくと同年代の子供たちが
一瞬でたくさん亡くなったこと
その日はいつもと変わらない朝で
いつもと同じ一日が始まるはずだった。

戦争で犠牲になるのは
毎日ふつうに、幸せに暮らしている人たち。
その人たちの幸せをうばって
どこの国が勝って
どこの国が負けて
そんなことに何の意味があるのだろうか。

今のぼくたちは
昔の戦争のことを忘れずに
たくさん勉強して
平和についてよく考えていかななくてはいけない
決して同じあやまちをおかさないように

平和とは戦争のないことです。今、ぼく達がいる日本は平和な国です。これも第二次世界大戦で犠牲となった多くの尊い命の上になりたっているのではないかと思います。そこで第二次世界大戦を体験した曾祖母にいろいろと話を聞いてみました。曾祖母は自分と曾祖父の話をしてくれました。

曾祖父は20歳代の若い時に召集されて長い間戦争に行っていました。騎兵隊にいて、みんなの指揮者として戦いました。勝っている時はよかったけど、負け始めると食料もなくなり、飢えをしのぐために、カエルや蛇を食べたり、泥水を飲んだりしました。シラミがわき、体力もなくなって多くの仲間が死んでいきました。とてもつらかったそうです。戦争が終わって中国に捕りよとして1年位つかまっていました。釈放されて日本に帰って来て、曾祖母と結婚しました。

一方、曾祖母は鉄砲の玉に火薬をつめたり軍事毛布を作ったりしていました。磁石を作って鉄くずも集めました。物資もとぼしくなるとみんなの家にある鉄を軍隊の人がきびしく集めにきました。食べ物もまずしく、さつまいも、かぼちゃ、なす、芋のつるなどをぞうすいにして食べることもありました。B29爆撃機が飛んでくると防空ごうにかくれました。名古屋市内には焼い弾が落とされ、離れた場所にいても火事の炎で昼間みたいに明るくなりました。町の人達はあまりの熱さに、お城のお堀に飛びこみました。その後には死者がいっぱい浮かんでいました。道路にはやけどをして皮ふがただれた人や死人でいっぱい、とても見られた光景ではなかったといいます。広島・長崎に原爆が落ちて戦争が終わりました。しかし、食べ物がなく、国から出る配給券で米やみそを買いました。また、町の人達は着物を田舎の人のところへ持って来て、お米や野菜と交換しました。戦争が終わってみんなががんばって少しずつ普通の生活ができるようになりました。何不自由なくおいしい食べ物を食べたり、遊んだりできる時代になりました。曾祖母は言います。

「戦争は二度と、してはいけない。平和が一番だよ。」と。

ぼくと同じくらいの年に大変つらい体験をしたんだと思いました。ぼくにはとてもたえられません。北朝鮮がミサイルの発射実験を何回もしてるけど、戦争にならなければいいのにと 생각합니다。戦争になれば多くの人達が悲しみ、不幸になるので、平和が一番です。

世界の他の国々で戦争をしているところがあります。ぼく達と同じ位の年の子が銃を持っているニュースが流れています。どんな気持ちなのかなと思います。一方では被害にあって怪我をしたり、家族を亡くしたり、悲しいニュースも流れています。戦争が終わっても傷ついた心はいつまでも治ることなく、残ることでしょう。戦争は多くの人達が悲しみ、不幸になるので戦争

することは絶対ダメだ！対話でみんなが仲良く生活できる平和が一番だと思います。

今回、曾祖母は終戦から72年経つのについ最近あったかのように話をしてくれました。苦い過去の出来事を話してくれたのは悲劇を繰り返すことなく、今の平和の大切さを言いたかったのではないかと思います。

伝える

第二中学校

3年

長谷川 拓 飛

「2分30秒」。この時間が何を意味するのか分かりますか。これは核爆弾による世界終末時計のカウントダウンです。つまり、今この瞬間から核を用いられた戦争が起こるか、または、何処かの国が所持している核爆弾が何かの拍子に誤爆してしまったら、この「2分30秒」のカウントダウンがスタートしてしまう可能性がいつでもありえるということです。

もし、仮にこの「2分30秒」のカウントダウンがスタートしてしまったら、私達はこの「2分30秒」の間に何らかの策を打ち出して、世界終末を防ぐことができるでしょうか。私はおそらく無理だと考えます。核爆弾が一度、起動されてしまうともう手遅れだというのは唯一の被爆国である日本が一番分かっているはずです。

ではどうすれば、核兵器が用いられることを防ぐことができるのでしょうか。それは、核の恐ろしさを説き、世界中に広めていって、核の廃絶を目指すしかないのだろうと思います。

私の祖父は、満州国錦州省線州市正陽区吉里街参拾壹号という場所で生まれたそうです。祖父は語ってくれました。七歳の時、満州で終戦を迎え、終戦時の生活では、家の窓に銃弾が打ち込まれ、弾を防ぐ為に畳みを窓に置き、防いだそうです。父をはじめ、男はロシア兵によりシベリアに連れて行かれ、極寒の地で重労働を強いられ、祖父は法定伝染病の「エキリ」にかかり、高熱を出したりと、曾祖父の生まれ故郷の沼津を目指し、帰国するまで毎日命の安全を脅かされたそうです。私は祖父の語る壮絶な人生談に物が言えませんでした。

私は思います。戦争、原爆は兵隊にかり出された人やその家族、被害を受けてしまった人だけでなく、さまざまところで多くの人の居場所を奪っていたのです。戦争の敗戦国も勝戦国も少なからず被害を受けています。戦争は終戦後にもかかわらず、その後も多くの人を苦しめ続けていました。戦争は何も生み出しません。ただ人を傷つけ、苦しめ、憎悪を生むだけです。争いは憎く、愚かだということを世界が知るべきです。

戦争は広い範囲でさまざまな場所や人に影響をもたらすということは私たちが伝えなければなりません。「2分30秒」のカウントダウンをスタートさせないためにも私達若い世代が広めていかなくてはならないと思います。

平和は放っておくだけでは訪れません。私たちが核兵器廃絶を訴えて、自分達で平和な時代を築いていくものであると、私は思います。

今回私に体験談を語ってくれた僕の祖父母にこの場を借りて感謝します。

この話は大切に私たちの手で後世に広めていきたいと思います。

平和な世の中の作り方

第三中学校

1年

山本 絵里佳

今朝のニュースで、アフリカのある国で自爆攻撃が行われていたことを知りました。

この自爆攻撃では、83人の子供達が使われました。この83人のうち55人が女の子で、大半が15歳未満で、赤ちゃんを背負っている子供もいたそうです。なぜ、女の子が多いのかというと、ある宗教では女の人は肌をかくさなければいけないので、そのことを利用して爆発物をかくすためです。子供を集めるために、その組織は子供をおどしたり、ゆうかいしたりしました。そして子供達は何も知らないまま、爆弾を持たされ、敵の陣地へ行き、遠隔操作により自爆してしまうのです。

昔、日本でも似たような攻撃手段を使っていました。しかしそれは大人の男の人で、自らの意思で敵国に自爆攻撃をしかけました。もちろん、今では戦争などしません。しかし他の国では、未だに戦争や紛争が行われて、さらには攻撃手段として子供を使っている所もあります。

私は、このことを知り、とてもショックを受けました。それを指示した大人たちは、子供をいったい何だと思っているのか聞いてみたいです。大切な命なのに、それをまるで道具のように扱っていることに、とても怒りと悲しみを感ずります。これでは何のために生まれてきたのか、私には分かりません。たとえ大人だろうが子供だろうが、命の大きさに大小はないと思います。子供だから何をしてもかまわないだろうと考えている人は本当にひどいなと思います。こんな地域がある中で、平和に暮らしている私はなんて幸せなのだろうかと感じました。

日本は戦争がなければ紛争もないし、学校に行って勉強もできて、ご飯も毎日食べられて、なんでも自由にできる国です。こんな国もあれば、反対に戦争や紛争があり、勉強もできなくて、ご飯も食べられるかどうかで自由すらない国があります。だから日本は本当に平和だと思います。戦争や紛争

がなくなり、戦争から解放され、人々が安全に暮らせるというだけでは平和だとは言えないと思います。子供は学校に通うことができ、ご飯も食べられて自由に過ごせて、差別がなく格差もなくみんなが笑顔で過ごせることが平和なのではないかと考えます。それに、それぞれのことを理解する気持ちも大切だと考えます。そもそも、相手のことを考えないで、自分の意見を貫きとおそうとするから、いろんな所で問題が起きるのだと思います。小学校から教わってきた、相手の立場で考えるということが大切だと思います。過去のあやまちから新たな考えを導き出すためにも、子供のころからきちんとした教育を受けられる環境を作ることが、平和に近づくための、第一歩になるのではないかと考えました。そして私は戦争についても考えました。戦争をして、私達にとってどのようなメリットがあるか考えてみましたが、国としては何かあるのかもしれませんが、私達には何もないと考えました。むしろ、大きな被害がおよぶだけだと思いました。今朝のニュースでも見たように、何十人ものぎせい者が出たり、けが人や死人、大事な人を失う人がたくさん出てくると思います。だから、武力ではなく、話し合いで解決できたら、今までで一番安全で、平和な世の中になると考えます。

この世が平和になるために、それぞれの立場を理解し、命の大切さについて、全人類がもう一度見直して、手を取りあって生きていく世の中になれば、誰もが笑顔で幸せに生きていけると思います。

一発の弾

第三中学校

3年

池野紹実

私は曾祖父に会ったことがありません。私がお母さんのお腹にいる時に亡くなったのです。お母さんから聞いた曾祖父は大正6年生まれで、とても真面目で優しい人だったそうです。

曾祖父が太平洋戦争に行っていた時は、もう曾祖母と結婚をしていたそうです。お母さんが曾祖父から聞いたのは、あまりたくさんの出来事ではありませんでしたが、唯一この話だけは曾祖父がしてくれたそうです。

場所はわかりませんが、曾祖父はアメリカの部隊と戦っていたそうです。あちこちから弾が飛んでくる中、曾祖父はまさにその場所にいたのです。私には想像もつかない光景だと思いました。もし私がお母さんの中にいたら怖くて一歩も動けなかったでしょう。血が流れ一瞬でその生涯が終わってしまうことに対して色々な感情が湧いてきます。曾祖父の隣で一人また一人その生涯を終えていったそうです。曾祖父は、その光景を目の当たりにして悔しくてアメリカに負けてたまるかと思ったそうです。私はお母さんに

「その光景を見てひいおじいちゃんは、つらいとか、かわいそうだとか思わなかったの。」と聞いてしまいました。

「昔は、お国の為天皇陛下の為に戦っていたので、いつ自分もその弾に当たるとはかわからない時に、そのような感情は持てなかったのではないかな。でもだからといってその人達に対して冷たいとかではないんだよ。私達には考えられないくらいの出来事が起きていたんだから。」

と母が言いました。

曾祖父はこの戦争で助かっています。その撃ち合いの時に曾祖父に弾が向かって来ました。曾祖父は水筒を肩から掛けていました。その弾が水筒に当たりました。曾祖父はその水筒のおかげで助かったと母に話をしたそうです。母が聞いたのは、この話だけだったそうです。曾祖父は戦争の話はあまりしたがらなかったようです。

私はこの短い話の中だけを聞いても、人の命の分かれ目はすごいと思いました。曾祖父は、助かったことにどのように感じていたかはわかりませんが、生き延びたことにもものすごく罪悪感を感じている人もいとテレビで見ることがありました。曾祖父もそんな思いがあったのかなと、感じてしまいました。私は生きて罪悪感を感じなくてはいけない戦争とは、いったい何なんだろう。家族にしてみたら祈る思いで生活し、戦争を耐えてきたのに生きて帰って来たら小さくなって暮らさなければいけない。戦争とはみんな被害者だと私は思います。曾祖父の命を救った水筒は、今はありませんが、母から私そして将来の子供たちに話すことが、私には出来るのだと思いました。

現在ある国からミサイルが飛んでくるのが頻繁にあります。そしてその行動に日本も他国も緊迫したムードが高まっています。一步間違えたら戦争という二文字が出てきます。今のこの状況を曾祖父だったらどう思っているだろうかと聞いてみたくになります。

日本はよく平和ボケと言われます。でも私は平和ボケの何が悪いのかと聞きたいです。ではなぜ戦争をしなくてはいけないのか、なぜ人は権力を持つとするのか、私には今は答えが出ません。太平洋戦争以来戦争を一度もしなかった日本の歴史に、何か答えはあるような気がします。そして生きて帰ってこられた曾祖父母を通して私はこの話を聞いたんだと思うと、いろいろと意味深さを感じてしまいます。

私は戦争を知らないけれど、人が憎しみ合うことで心を壊していくことは、分かります。将来の子供達のためにどうか心穏やかな世界であって欲しいと心から思います。

1945年8月15日は、ラジオから昭和天皇の玉音放送によって日本の降伏が国民に発表された日です。どんな思いでラジオから流れる放送を聞いていたのでしょうか。私には想像もつきません。悲しさや悔しさ、この先どうなるのかという不安や、戦争が終わったことへの安堵だったのでしょうか。正直、こういった機会が無ければ戦争について考えることもしないで、日々の生活を送っています。北朝鮮がミサイルをくり返し発射しているニュースを見ても、他所の国のこととしてあまり気になりません。戦争を知っている人や、経験した人からしたら、どれだけ幸せなことでしょうか。

ある有名なコーヒーショップの黒板にこんなことが書かれていると、話題になっていました。

「皆さんが飲んでいるコーヒー、その豆のほとんどがアフリカや中東、ラテンアメリカなどの政情の不安定な地域から輸入をしています。“おいしいな”と感じているそのコーヒーが内戦や紛争によって来年から飲めなくなることもあるのです。“ほっとする”“のんびり”“落ち着く”という言葉で表わされるコーヒーは、実は世界から、危険な地域からやってくることもあります。戦争と平和というあまり身近に感じないかもしれませんが今、飲んでいるコーヒーやフラペチーノが飲めなくなるかもしれないと思うと平和について考えるひとつのきっかけになるのではないのでしょうか。今年長崎は戦後72年目の夏を迎えます。あなたにとって“平和”とは何ですか？」

とても多くの反響があったそうです。コーヒーに限らず、日本は多くの物を世界各地から輸入することで、今の生活が出来ています。日本が戦争に巻き込まれなかったとしても、輸入先の国や地域が戦争を始めたり、巻き込まれてしまったら突然、今の生活が出来なくなってしまいます。今の世の中では、お金は必要ですが欲しいと思った物はそろえることが出来ます。ネットが普及し、自分は動かなくても商品を手にすることが出来ます。そのことをお金を払っているのだから当たり前だと思ってしまう、商品を作っている人や、届けてくれている人への感謝の気持ちがとても薄くなっていると思います。私もそうです。

全ての物が自分の国や地域だけでそろえ、手に入るという国は、どれ位あるのでしょうか。ひょっとしたら、全世界のどこにも無いかもしれません。そうだとしたら、どの国の人も他所の国の方々にお世話になっているのです。国、話す言葉、肌の色、宗教が違うから敵なのでしょう。この世の中に他の人が居なかったら、自分ひとりだったら何が出来るのでしょうか。きっと何も出来ないし、しようもしないと思います。生きてくことも拒否するかもしれません。とても悲しいことです。

ひとりひとりが、自分と関わっている全ての人に、感謝する気持ちを持っていれば、それがどんどん広げて行けば戦争を喧嘩を、いじめを無くすことは、難しいことでは無いんじゃないかと思います。

コーヒーショップの黒板に書かれた最後の言葉、
「あなたにとって“平和”とは何ですか？」

私は、皆が素直に「ありがとう」を伝えられることだと思います。私も誰かが何かをしてくれたら「すみません」ではなくて「ありがとう」を口に出し、私の周りに「ありがとう」が溢れるようにしていきたいです。

平和の建設

第四中学校

3年

萩本大翔

8月6日、僕は約70年前のことを考えながら黙とうをした。一九四五年のこの日、広島に原爆を落とされ、罪のない大量の人々が犠牲になった。どうして戦争は起こってしまうのか、と考えながらその日を過ごした。しかし今の日本は平和だ。約70年前まで戦争をしていたとは思えないほどである。どうしてここまでの平和をつくることができたのか。僕はこれを知ることが、戦争を起ささないための重要なことだと思う。

1945年8月10日、昭和天皇・鈴木貫太郎内閣はポツダム宣言の受諾を決定し、ここに日本は終戦の道を選んだのである。その後日本にマッカーサー元帥が上陸。連合国軍に占領されたのである。

皇族出身の首相が総辞職すると、続いて1945年10月、幣原喜重郎という男が組閣した。この男はかつて加藤高明・濱口雄幸・若槻礼次郎内閣で外相として協調外交を行った人物である。幣原の組閣とともに日本の現代まで続く平和の建設が始まるのである。

幣原喜重郎内閣は、たったの7か月だけだったが、平和建設に大きく関わった。財閥解体や農地改革など、戦後改革で有名なことは、ほぼ幣原内閣から始まっている。また、1946年元日の昭和天皇の人間宣言には、幣原首相も関わっている。幣原は、平和を維持するためにも、天皇の神格が危険であると考えていたのだと思う。続く吉田茂内閣で、幣原内閣より制作が行われていた日本国憲法が公布・施行された。まだこの時、終戦から二年もたっていなかった。

何という実行力だ。僕は一番にこれを強く思った。原爆を落とされ、ぼろぼろになっていたと言ってもいい日本が、2年もたたぬ内に新憲法を制定し、さまざまな改革を行い、敗戦国とは思えないほどの復活ぶりである。なぜここまで復活させる実行力があつたのか。そこには当時の人々の願いが関

わっているのだと思う。その願いとはもちろん「平和」という人々を幸福にする漢字二文字である。戦争など二度と起こしてはいけない。人々は平和を願い、そう思ったに違いない。そしてその思いが、日本復興の原動力となったのだと思う。幣原喜重郎首相は特に、戦争の放棄を望んでいた。その理由には、かつて協調外交を行ったのも一つだが、戦時中に空襲による被害を受け、仲の良かった石井菊次郎をも空襲で亡くし、絶対に戦争を起こしてはいけないと、心の底で強く思っていたからだろう。この思いが幣原にとっての原動力となった。そして幣原は平和を意識し、行動を起こすのである。日本復興の原動力は政治家だけとは限らない。日本国憲法の制作の際には、高野岩三郎ら民間の憲法研究会が提出した憲法草案要綱が参照されるなど、民間の人々も活躍しているのである。彼らもきっと、戦争はしてはいけないという強い思いによって行動を起こしているのだと思う。これも日本復興の原動力の一つである。これら一人一人の平和の願いが、新たな日本をつくる実行力となっていったのだ。

1956年12月、祖母によると当時有名だったという重光葵外相は、国連加盟の記念式典に参加していた。つまり日本は国際連合に加盟したのである。記念式典の二か月前、日本は鳩山一郎首相によって日ソ共同宣言に調印し、ソ連との国交を回復していた。すでにこの時日本の独立は回復しており、他の国との国交も行われ始めていた。これほどまでに日本が復活したのはやはり戦後の人々の努力のおかげであろう。そしてその努力が実り、国際連合の加盟にまでになった。また、平和の建設も国際協調や民主化と、しっかり行われていた。日本復興や平和への大きな一歩となった国連加盟は、終戦からたった11年で実現した。そこには、平和を願う人々の努力があったことを忘れてはいけない。

終戦から70年程たった現在、日本はとても平和である。虫の元気な鳴き声や小鳥のさえずりを聞いていると、そんな気がしてしまうのである。この平和を守るために、自分もがんばっていかなければならない。終戦から70年間、平和を目標に幣原喜重郎や吉田茂、石橋湛山などさまざまな人が活躍した。しかし彼らだけのおかげで、平和が来たわけではない。国民のことを忘れてはいけない。そして自分はその一人であることも忘れてはいけない。だからこそ自分もがんばるのである。絶対自ら戦争の方向にかじをとってはならない。たとえそういう状況が来ても、一歩でも平和の道を選ばなければならない。我々は、平和という建物を壊すのではなく、建設していくよう努力していく必要があると感じた。

戦争は残酷だ。なぜ終わらない、なぜ続く。なぜ戦争をするのか。私は、とても無知である。

戦争は、復讐だ。人間の復讐は決して止むことなく続く。復讐は憎しみの固まりだ。憎しみが生まれたらやさしさはやがて消滅するだろう。そして、人間としての在り方を忘れてしまう。戦争は勝負がつくまで絶対に終わらない。中断することは不可能なのだ。だれにも止めることができない。だから戦争ははじめてはいけない。絶対に。

戦争は知らない方がいいのか、という疑心をずっと抱いていた。「戦争ってなんだろう」と、戦争をだれも知らなければ幸せなのではないか、と思っていた。しかし、戦争を二度とくり返さないように、忘れないようにするのが正当であるそうだ。戦争の恐怖を私達がなかったことのようにするのはたしかに間違っているだろう。「戦争」という存在を次の世代に残すことに意味があるのではないか。

戦争はやめられないのか。

「戦争が起こっていた当時は、白い絵の具を食べていた。」と、ある人が言ったそうだ。戦争が起こると関係ない人まで人間としての体ではなくなってしまふ。みんながみんな、こわれてしまふのだ。ではだれが戦争をはじめたのか。だれなら戦争を終わらせられるのか。ただただ今戦争をしてる人を憎めばいいのか。さっぱりわからない。だれを責めたらいいのか。私はまだ戦争について知らないことだらけだ。どれだけ作文に思いを書いても、どれだけの方が戦争を怖がっても現状は何も変わりはない。ただ、戦争を忘れないように。恐怖を忘れないように。先人の人のために。今のためにできること、一般人ができることを考えていく必要があると思う。私達が戦争を百パーセント理解するのは不可能だ。正直私は軍隊についてのことや、戦車についてのことにもわかっていない。しかし一つだけ確実にわかること。それは戦争は「こわい」ということだ。憎しみで満たされた人間が殺し合う残酷なもの。人が人ではなくなり民間人は犠牲者となる。これを「残酷」というのだろう。

どれだけ戦争について考えても、なぜ戦争をしてしまふのか全くわからない。なぜわからないのか、なぜなにもできないのか、無力な自分に腹が立つ程だ。私達が美術で使う絵の具は食べ物だった。私達の使う「物」は戦争の経験者による「食材」だったのだ。私はこれから絵の具を見るたびに、戦争を思い出す。

私は「アンネの日記」という本が大好きだ。隠れ家での生活、恋についてアンネは日記に書いていたが最終的には殺されてしまふ。殺されてしまつた

ら大切な思い出も無くなってしまう。

戦争というものは人間としての在り方、優しさ、心をうばうものなのだ。そう、戦争は残酷だ。

広島を訪れて

片浜中学校 1年 古 屋 陽

私は、8月9日～11日にかけて母と広島へ旅行に行った。実は自由研究（社会科）の資料集めもかねて行った広島だったが、私が見てきた原爆ドームや資料館で知った原爆の悲惨さを伝えたいと思い、この作文を書くことにした。

私はまず最初に原爆ドームを見て、次に原爆慰霊碑を通り広島平和記念資料館に行ったので、原爆ドームから順を追って伝えていきたいと思う。

原爆ドームはもとは広島県物産陳列館という名称で、大正4年に広島県内の物産品の展示や販売する目的で建てられたそう。昭和20年8月6日、8時15分、爆心地から南東約160メートル離れていた原爆ドームは爆風と熱線を浴びて大破し、天井から火を吹いて全焼した。爆風がほとんど垂直に働いたため、本館の中心部は奇跡的に倒壊を免れ、現在の姿になった。現在、原爆ドームの中には入ることが出来ず、外からのみの見学になってしまうのだが、中は瓦礫が散乱しており、骨組や鉄骨の部分はむき出しになっている。私も小学校の頃に教科書で何回も原爆ドームを見ている。これは皆も同じだと思う。実際目で本物を見ると、何か言葉では伝えきれない印象が受け取れた。受け取る印象は人それぞれだろうが、私は建物をいとも簡単に破壊できる原爆の恐ろしさや、一瞬で亡くなった人の無念さ等を感じた。そして、まだ行ったことのない人には是非一回は、訪れてほしいと思った。

原爆慰霊碑は広島平和記念資料館の南側、かなり離れたところに建っていた。碑文には「安らかに眠って下さい。過ちは繰返ませぬから」と書かれている。私が見たときは、フェンスが邪魔で上手く読み取れなかった。この碑文の“過ち”と言うのは誰が犯したのか、ということで建立以前から議論があったらしい。私は、過ちは日本にあると思っている。アメリカが日本に戦争を仕掛けたのではなく、日本がアメリカに戦争を仕掛けた訳だから原因は日本にあるのではないかと考えたからだ。しかし、広島市では、主語は人類全体と受け取めているようだ。誰かのせいではなく、このような悲惨さを繰り返してはならないということを表していると考えているようだ。要するに、犯人探しをしてこいつが悪いと誰かを責めるのではなく、未来に悲惨な出来事を繰り返さないで欲しいということ伝えたいということだろう。

広島平和記念資料館に入って一番最初に行ったのは地下一階だった。中はとても広く、大きな絵画が飾られていた。この絵は当時、木造住宅が多かった広島に原爆が落ちたとき、その熱線で火災が起こって、火の海になった街の姿を描いたものだ。絵画の右上には、何かわからぬものが描かれていた。悪魔なのか神なのか、それとも亡くなった方を描いているのか。何だかわからぬ姿がそこにはあった。絵は大半を赤色朱色で塗られておりその中に混じるように右上にいる物体がある。

奥に進むと、新しく見つかったと思われる資料や洋服等を展示するところがあった。原爆の絵、焼けこげた洋服、経験談をのせた絵などが展示してあり、とても重々しい雰囲気だった。一階に上がり、母がガイドを付けた方が良いと言ったので、年配のガイドさんと一緒に回ったが印象が強かったのは、原爆が落ちる前の広島、落ちる瞬間、落ちてすぐの広島、それからの広島を再現をした映像だった。実際の状況をより詳しく理解できた。他にもやけどを負った人の写真や衣服、焼けた三輪車等があり、私はそれより軽く言葉で表わすことが出来ず、ただただ見ることしかできなかった。とても痛々しくそれを自分に置き換えてみることも、実際に被爆をした方々の痛みを想像することもできなかった。場所を移動すると広島と長崎に落とされた原子爆弾の模型と名前が展示されているコーナーもあった。そうして私は館内を回り、ガイドさんに導かれ様々な所を訪れた。

私が一番伝えたいのは、写真ではなく実際に広島へ行き、自分で感じ取って欲しいということだ。戦後七十二年が経ち、本当に戦争を体験した方々が居なくなってしまっていて、戦争を語りつぐ人々が少なくなっている。私は今のままだと戦争への危機感が薄れてしまうのではないかと思っている。だから戦争とは繰り返してはならないものだということを自分自身で感じ取る必要があると、この旅で実感した。

広島原爆

片浜中学校

2年

佐野心音

「71年前の、ある晴れた日、広島に原爆が落ちました。」とアメリカのオバマ大統領が2016年5月27日、広島に来て演説しました。「みんなが、なぜ広島に来るのか。恐ろしい力を持ってしまったことを考えるため、あのとき亡くなった10万人を超える人たちのことをしのぶために来る。」と。

そして「1945年8月6日の朝の記憶を決して薄れさせてはなりません。その記憶があれば、私たちは戦争しがちな自分たちを変えることができ

るのです。もめごとは、戦争ではなく話し合いで解決しなければならないのです。」と話しました。

オバマ大統領は、世界から核兵器をなくしたいと考えています。その主張でノーベル平和賞を受賞しました。トランプ大統領も同じ考えであって欲しいと強く思います。

広島原爆について以前から本やテレビで見たことはありましたが、今回、実際に自分の目で原爆ドームを見た時、鳥肌が立ちました。骨組みだけ残ったドーム。ひどく崩れてしまった壁。原子爆弾が落ちたということの重さを感じました。

平和資料館には、たくさんの展示物がありましたが、その中に原子爆弾の模型がありました。実物は、4メートル程だったと書いてありました。たったその一発で広島の14万人もの罪のない人々の命が一瞬で失われてしまったなんてびっくりしました。

たくさんの方が円の周りで覗き込んで見ているコーナーがありました。私も人の中から覗いてみると広島街並みの模型でした。しばらく見ていると赤い丸が映り『爆心地』と表示されました。町を行きかう人々や車が映し出されたかと思うと突然、さっきの模型の形の爆弾が「ドーン！」と落ちて、きのこ雲が広がりました。次に映し出された街は、あたり一面、建物がほとんどなくなった焼け野原でした。ショックで胸が詰まりました。

最後に地下に行き、オバマ大統領が自ら折って、出迎えてくれた子どもにプレゼントしたという折り鶴を見ました。とてもきれいに折ってありました。平和の願いが込められていると感じました。

平和記念公園で見た「原爆の子の像」は、佐々木禎子さんという女の子がモデルになっているそうです。禎子さんは2歳の時に被爆しましたが、元気に暮らしていて、10年後、突然白血病を発症して亡くなってしまいました。『元気な体に戻りたい』入院中折った鶴は、1300羽にもなったそうです。とても可哀そうです。

今でも毎年、たくさんの折り鶴が原爆の子の像の所に納められています。入りきらなくなった鶴は今まで焼却処分されていましたが、最近では、リサイクルハガキになっているということで私たちは一枚ずつもらいました。確かにいろいろな色の細くなった折り紙がハガキに入っていました。一枚ずつ全部違ってきます。みんなが思いを込めて折った鶴が、ハガキに形を変えてたくさんの人へ配られているのだと感動しました。とても素晴らしい取り組みだと心がゆさぶられました。

平和記念公園には、原爆を決して忘れないように『平和の時計』もあります。それは、毎朝八時十五分にチャイムのような曲が流れるようになっています。

今、私は、当たり前のように生活できる、家族と一緒に居ることができる、学校に行くことができる、友だちと楽しく笑い合うことができる、.....そんなことに感謝する気持ちを持っています。原爆は決して忘れてはならない過去です。世界中から戦争がなくなり、いろいろな国々、人々が助け合えるような世界になってほしいと切に願います。自分の周りからより良い環境をつくり、平和に向かっていきたいと思えます。

『消えた八月』にのせて

片浜中学校

3年

水野未夢

熱い光の中で
僕は一枚の絵になった
熱い風の中で
君はひとつの石像になった
光に打たれて
僕は壁にとけた
風に吹かれて
君は大地に消えた
僕は影になった
君は物になった

『消えた八月』この歌を私は、今年の文化祭で歌うことになった。

この歌は、1945年8月6日に起きた広島県広島市にアメリカ軍によって投下された原子爆弾の様子を題材にした作品である。

広島原爆によって命を落とした人数は、1945年12月末までに約14万人と推計されている。その後も重傷の人たちは次々と命を落としてしまっているのだ。

私はある一枚の写真に目を止めた。それはアリみたいな黒く小さなものが身体中にたくさんある人の写真だった。それは死の斑点、ケロイドというものだった。ケロイドとは、やけどなどが直ったあとに出来るもの。原爆の放射線によってできたのだ。死の斑点と言われているだけあって、放射線によってこのケロイドという斑点ができると死んでしまうのだ。私はこの写真を見て、改めて原爆の恐ろしさを知った。

憲法九条というすばらしい内容の憲法が日本にある。しかし、その内容とかみあっていないのが日本の現状だ。「戦争をしない」「戦力を持たない」「交戦する権利すら認めない」と掲げている。そして、武力の行使は国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。この内容は、戦争が起こることを前提に考えていると私は思う。それは間違っているのではないか。日本の使命は、戦争が起こらないようにすることだ。

最近テレビゲームや、スマートフォンゲームなどで、戦争を題材としたゲームがある。それは非常にかっこよく、おもしろいものである。しかし今現在、ボタン一つでミサイルを搭載した核爆弾を打つことができってしまう現実もある。そのゲームと現実の世界との区別ができなくなってしまい、ゲーム感覚で戦争が起こってしまうこともあるのではないか。それはあってはならないことだ。

私はある日、友達に聞かれた。

「広島に原爆が落とされた日いつか知ってるよね？」

と。私は答えられなかった。私は友達に、

「だから今問題になってるんだよ、若い世代が原爆のことを知らなすぎだつて。」

と言われてしまった。

『消えた八月』この歌の歌詞からはたくさんのことが想像される。「君は大地に消えた」この歌詞からは、一瞬にして人が溶けて消えてしまうということが想像できる。「影になった」「物になった」この歌詞からは、言葉であらわすことができないほどの悲惨な姿が想像される。

しかし、これらの現状を知らないのが、あの日友達に質問されても答えられなかった私のような人たちなのだ。あの日の私のような人たちがいる限り、原爆の悲惨さを知ったり、学んだりすることが必要なのだ。そして、多くの人たちにもっと伝えていなければならないのだ。

このように一瞬にして多くの犠牲者をうむ核爆弾を、今現在もアメリカやロシア、イギリス、フランス、中国、インド、パキスタン、北朝鮮、イスラエルなどの各国が大量に保有している。中でも北朝鮮はミサイルに核爆弾を搭載して、アメリカや日本を攻撃するなど脅し続けている。このような内容は、ニュースでも話題になっている。もし本当に日本に攻撃をしてきたら、日本には8月6日のように甚大な被害が及ぶことになる。もう二度とあのようなことが起きては絶対にならないのだ。だから、このようなことが起きないように話し合いで平和的に解決できるようになるよう努力してほしい。そのために、まず私たち世代が、高齢化が進む今“核の廃止”をもっと世界に伝えていかなければならない。

私はもうかつての広島のような悲惨な姿を日本で見るとは絶対に嫌だ。世界全体が平和になることを切に願っている。

広島と長崎を訪れて

金岡中学校

1年

金 崎 ゆ り

今年もセミの声がうるさい暑い夏がやってきた。大合唱で短い命を一生懸命に生きようとしているセミ達を見ると72年前に原爆をおとされた広島、長崎のことを思い出す。

私は、去年の7月に長崎を、今年の3月に広島を訪れた。どちらの街も路面電車やたくさんの車、オシャレな店がたくさん並んでいてとてもきれいな街なみに見えた。

しかし、華やかな外見の裏に悲しい過去をせおっているのを感じた。

広島を中心街のはずれに静かに、でも重々しくたたずんでいる原爆ドーム。これまで本やテレビでしか見た事がなかった物が現実的に思えてきた。少し心がひきしまった。

外国人観光客が大勢来ていた。ピースしたり笑顔でドームの前で写真撮影をしているのを見て心が痛んだ。

ドームは、当時の広島としては珍しいヨーロッパ風のデザインで、一部鉄骨を使用した広島の名所の一つに数えられる程市民にとって自まんの建物だったそうだ。そしてそれが今では平和のシンボルとして保存管理されている。

少しすると分厚いファイルを何冊か持ったおじさんが

「少しお話してもよろしいですか。」

とやさしく話しかけてきてくれた。話を聞いてみると被爆二世とのこと。ボランティアで戦争の恐ろしさを語っているのだそうだ。

終戦から72年たった今でも、原爆の後遺症に悩まされていると聞き戦争は終わっても心や体のキズは全く癒えないのだと思った。

去年の夏、長崎に行ったときにも、原爆資料館を訪れた。広島でも長崎でも資料館には、たくさんの人々の生活が一瞬でうばわれた資料が数多くあった。

その中でも私が一番印象に残ったのは、顔の大半がケロイドになっている男の子の写真だ。その子の目は、何かを恨んでいるような目だった。この子の家族はどうなったのだろうか。この子はどうやって一人で生きていくのだろうか。この子の命はもう長くないのかもしれない。もし私だったらどうだろう。一人とりのこされたら。足下で、黒い死体がゴロゴロころがっている中で、一人生きていくことになったらどうしよう。私は思わず目をそむけてしまった。

私は、世界の核兵器所持数の模型を見たことがある。アメリカだけではない。中国、ロシアそのほかにも数えられないほどの核兵器を持った国があ

る。私は一つの国が持っている核兵器の多さにおどろいた。多い国で、約7300発。これをすべて打ったら、きっとこの地球がなくなってしまうと思った。

今、世界中で核を使わないと約束しているのに平然と核開発を進め、ミサイルを打っている国がある。自国の力を誇示するための核開発は許されない。なんとかして止めようと世界規模で圧力をかけているが、何度も繰り返される挑発行為に対しアメリカは圧力を強め一触即発のにらみ合いが続いている。今後日本にも影響があるかもしれない。自分達の都合だけを考えて、相手への配慮が欠けていないか。現代を生きる私たちにできることは、家族、友人さらには見ず知らずの人々にも思いやりを持って生きること。一人一人の心の持ちようで世の中は変わっていくかもしれないと思った旅だった。

忘れてはならない

金岡中学校

2年

加藤礼華

テレビに映る原爆ドーム。その映像を見る度に、広島を訪れた時の事を思い出します。

小学四年生の夏でした。初めて目にした時は、この壊れた建物は何なんだ?と思い、進んでいきました。広島平和記念公園はとてもきれいに整備されていて、原爆死没者慰霊碑がたくさんありました。その奥にある広島平和記念資料館の見学をしてから、私は恐怖と原爆の残酷さ、悲しさで一気に戦争の恐ろしさが伝わり、帰る時には原爆ドームを見る目線と、慰霊碑に手を合わせる気持ちが全く変わっていました。

原爆というのは、何百キロメートルもの被害を出します。人や建物全てを焼きつくしてしまう様な悲惨でしかない状態にしてしまう恐ろしいものです。

ひいおばあちゃんは、私に戦争の話聞かせてくれました。沼津にB29から焼夷弾が落とされた時のことです。家の屋敷へ3つ落としていったのを実際に見たそうです。また、当時はおなかの中に赤ちゃんがいて、子供も一人いたそうで、一人をおんぶして、おなかは大きかったから、大変だったと言っていました。一晩は川で過ごしたそうです。そして、下土狩まで歩き、親せきの人の馬れきへ乗り、実家がある御殿場の阿多野まで行ったそうです。8月15日には、無条件降伏で終戦になりました。ひいおばあちゃんは最後に、

「戦争が終わって安心したけれど、この戦争で子供一人が亡くなってしまっ

た。戦争が二度とない平和な世の中になってほしい。」

と、涙ながらに話してくれました。72年が経った今でも、当時のことを鮮明に覚えていました。本当に戦争が怖くて、頭から離れないんだなと思いました。

そして私は今年の夏、沖縄平和祈念公園を訪れました。強い日差しと生ぬるい風が吹く中歩いていると、たくさんの慰霊碑があり、私はがく然としました。書いてある文字を見ていくと、都道府県の名前が書いてありました。四十七都道府県全てが違う形でした。

「沖縄戦にはどこの県からも軍隊が来たからだよ。」

と案内するおじさんが教えて下さいました。私は沖縄戦だから、沖縄の人たちだけが戦ったと思っていたのでとてもおどろきました。また、太平洋側へ進んでみると、さっき以上に慰霊碑があり、とてもびっくりしました。そこには沖縄戦で亡くなった一人一人の名前が刻まれていました。

その瞬間、私は言葉を失いました。また、世界遺産に登録されている首里城は沖縄戦で焼失しました。1992年には復元して、今ではきれいな城となっています。戦争がなければ何十年も崩れず、きれいな城として残っているのに、戦争が起こることによりたくさんの人を悲しませ、国のシンボルを失ってしまいます。そんな戦争は絶対にしてはいけないと思います。

一つの戦争で、多くの人命がうばわれ、残された人にも辛さを与える戦争は二度と起きてはいけません。今、私達ができることは、この悲惨な戦争のことを理解し、次の世代にも引き継ぎ、戦争のない平和な世の中にしていくことです。今でもこの世界のどこかでは、戦争があり、命を落としている人が多くいます。もっともっと命の大切さを知るべきだと私は思います。

意思の継承

大岡中学校

3年

岡部未空

平和。この言葉から何を思い浮かべるでしょうか。幸せの象徴である白いハト、青空、満開の桜、それとも...

この頃私は、平和について考える機会が多くなってきたと思います。たとえば、学校の授業の中で。三年生になってからいろんな教科に平和を考える内容があったり、実際に戦時中の日本の様子がわかる映像を見たりと、様々な形で学んできました。私は、戦争がからんでくると、ついつい目をそむけたくなるような、これ以上は嫌だ、というような変な苦手意識を持っていました。戦争が悪いことというのは分かっているから、もういいじゃないかとさえ思う気持ちもありました。しかし、あることがきっかけで戦争だとか平

和について学ぶときの考え方が変わりました。

夏休みのお盆で、祖父母の家に行ったときの事です。なにげなくテレビを見てみると「今日は終戦記念日」というテロップとともに、ニュースが流れはじめました。それを見ていた祖母が、「聞きあきたことだけど、戦争の時の話をしようね」と毎年恒例の話を始めました。毎年ほぼ変わらないはずなのに、今年は学校で戦争についてたくさん触れたからかもしれませんが、とても興味深いと思えました。たとえば、終戦間近に東北に疎開に行ったときの話を食べるものといえはさつまいもくらいしかなく、あきるほどさつまいもばかり食べ、今でも食べたくないということ。防空トンネルを移動した翌日、もといた場所で空襲がおこって誰ひとり助からなかったという話。戦後でも食べものがなく苦しい生活が続き、祖母の家は腐りかけの白米をすりつぶして水でこねて団子状にし、まずくても生きるために必死で我慢して食べたというつらい思い出。ほかにもたくさんの壮絶な話を、祖母は知っていて、自らが体験していて、話すことができます。学校で学んだときより、身近な人が話すほうがより真実味が増し、恐ろしさを理解しやすくなる、ということに気づいた私は、祖母の世代がいなくなってしまうても、戦争について話せる人がいなければならないと考えました。また、私のように戦争というだけで目をそむけてしまう人がいてはよくない、とも思いました。これには、私自身かなり驚いたことと結びついています。

それは、祖母が生まれたのは終戦の四年前つまり、終戦前後の実際の記憶はほとんど無いということです。これはどういうことかということ、あれだけすらすらと戦争について話せる、または知っている祖母もまた、戦争について話せる人から語りついできたということです。そして今孫である私に語っているということは、単なる昔話ではなく、言いかえれば、祖母より上の世代の人たちからの意思の継承だと思いました。こう考えるととても責任重大で背すじがのびるような気持ちになります。しかし、やはり祖母がしてきたような役割を次に担うのは私たちだから、目をそむけるどころか、しっかり目に焼きつけ、耳にも焼きつけなければならないと思い、戦争について深く学ぶ理由がやっと、しっかりわかった気がします。

学校の授業で見た「はだしのゲン」や、「かわいそうなゾウ」の実写化でクラスが静まりかえってこらえきれずに涙を流してしまう人もいます。映像の中身ももちろんそうだけれど、こんな経験も覚えておくといいのかなと思います。今の私たちには、世界平和や核兵器の根絶なんて大それたものは、そうそうできないでしょう。それならば、逆に今の私たちができる最大限、意思の継承を絶やさないように努力することがとても大切だと思います。

平和。この言葉から祖母が思い浮かべたものは、何事もなく過ごせる日

常。私たちは戦争の悲惨さを伝えていくと同時に、今ある幸せのありがたみを感じて生活するべきなのかもしれません。

平和の意味と促進について

大岡中学校

3年

金澤貴弘

1945年8月、それは太平洋戦争も終盤に差し掛かり、日本軍の必死の抵抗も敢え無く、終戦へと向かった、歴史的な月である。太平洋戦争だけではなく、大小様々な諍い、争い、紛争、戦争が起こり、尚、今でも、勃発している。現代の社会において、「平和」とはどのようなものか、また、平和を守り、維持するために、どのような努力が必要かを考えることにした。

「平和」とは、どのような状態のことだろうか。戦争がないこと、安穏なこと。これらを真っ先に思い浮かべるのではないか。それでは、平和の対義語は何だろう。戦争、暴力などだろうか。僕は、平和とは、この世界に生きる、全ての者が、ある程度の自由を保ちつつ、他者と共存できる状態を指していると考え。勿論、平和という概念は、抽象的であるため、皆、一概に同じような状態を想像するとは、考えにくい。各に、多様な考え方があるだろうし、その考え方を認め合い、助け合うことが真の平和だと主張する人もいるかもしれない。しかし、他人を傷つけて、虐げて、自分達だけ幸せになることは、果たして、平和といえるのだろうか。いえないと僕は思う。自らの安全を求めるあまりに、他者を危険にさらすことは、世界全体の安全につながらない。平和とは、“ある程度”の自由を保てる状態だ、と、僕が前述した訳は、正に、自己の権利と他者の権利の両立の問題があるためだ。自己と他者の権利や主張に折り合いがつかないことは、よくある。そして、対立が起きた場合、身分や、性の別なく、時には、仲介者の下、双方の状況に鑑みて、妥協点を探すことになる。このようなシステムは、人間が社会生活を送る上で、争いを未然に防ぐ点において、役に立っている。以上を踏まえて、平和とは、多様な生き方、考えを認め合い、他者に害を与えず、全ての者が対等かつ、平等に扱われる状態を表わすこととし、話を進めていきたいと思う。

それでは、そんな平和を守り、維持するために、どのような努力が必要だろうか。現在、PKOや国連NGOなどによる、アフリカなど、発展途上国や、紛争国での活動が、報道で取り上げられている。しかし、そのような世界的活動は、インパクトはあるが、私達、中学生が参加できるものが少ない。世界に目を向ける前に、自分の身の回りではどうだろうか。例えば、家族。家庭での役割分担や、負担を分け合っているか。友達が嫌がっているこ

とをしていないか。困っている人に手を差し伸べるだけでも、平和が広がっていく。勿論、平和維持をしている人達を、金銭的に、若しくは、励ますなど、何らかの形で援助することでも平和は、訪れる。自らの利益を追求するのではなく、他者と共に生きていくことも大切だ。平和になるといって、核兵器を使用しない、戦争を起こさないなどと、世界的な、とても大きな問題が取り沙汰されるが、大きな課題は、解決するのも、それだけ難しい。そこで、僕は、皆さん一人一人ができる、簡単な、平和への努力を提案したいと思う。とても簡単なこと、挨拶をする。朝起きてから、寝るまでに出会う人に、挨拶をして、できれば、会話をする。そうすると、挨拶をした方も、された方も、とても気持ちがよくなる。そして、また、たくさんの人と挨拶を交わす。どんどん、挨拶の輪が広がっていく。すると、身近な人とのやりとりも増え、楽しい時間が過ごせるだろう。こうして、身の回りから、平和を広げることができる。

最後に、平和をどのようなものと想像しても、世界中の人々が目指す平和に向かって、一步一步、着実に努力を積み重ねていかなければ、絶対に世界平和は訪れないと思う。さあ、みなさん、私たちの手で世界平和を作り上げましょう。

うすれつつある戦争

静浦小中一貫学校

9年

佐藤花音

幼いころの私は、「戦争」と聞いてもそれがどんなものかわからず、「昔は大きな争いがあったのか。」と感じるだけでした。戦争に関わる映画やドラマなどをみても、それが昔の日本でおこっていた、という、事実をみとめられず、実感がわきませんでした。

しかし、中学三年生になり、歴史で戦争について学ぶようになると、だんだんと戦争の悲惨さ、恐ろしさなどがわかるようになりました。それは、私が幼いころに感じ、考えた「戦争」よりも、はるかに大きく厳しいもので、衝撃を受けました。そこから私は、戦争についてもっと学びたいと、初めて深く考えるようになりました。

私たちの修学旅行は、沖縄です。事前学習として、沖縄戦争について調べました。

それまで、戦争について深く知らなかった私は、その内容が信じられませんでした。特に深く調べたのは「ひめゆり学徒隊」についてです。ひめゆり学徒隊とは、沖縄師範学校女子部と、沖縄県立第一高等女学校の二校が一つになった学徒隊のことです。当時、彼女たちは学生でありながら従軍看護婦

として働いていました。空気は湿り、奥に行けば行くほど暗くなる、アリの巣のように掘りめぐらされたいくつもの壕の中で、彼女たちは一生懸命兵士の看護をしていました。また、そうじや雑用、壕を掘りすすめる厳しい労働のほか、傷病兵に食事や薬を与えるなど、種類を問わず全般的に働き続けました。戦争が激しくなるにつれ、彼女たちの仕事は増えていきます。たくさん運ばれてくる患者に対し、手がまわらなくなってくると、たくさんの方が亡くなりました。その死体を、敵の攻撃から逃げながら捨てていくのでさえも、彼女たちの仕事だったのです。さらにその後、懸命に働いていた彼女たちには解散命令が下されます。戦争が終わると信じ、国のために命をかけてでも働いてきたのに、もう勝ち目がないからといって見捨て、降伏させるわけでもなく自決までさせていたという国の事実、私は胸が苦しくなりました。もし自分だったら...と考えると、ゾッとします。なぜ、何も悪くない国民や、学生までもが犠牲にならなければいけなかったのだろう、と悲しい気持ちがかみ上げてきました。

そんなことを感じながら行った、沖縄での平和学習では、資料や言葉だけでは知ることができないような、本当の戦争の恐ろしさを感じました。ひめゆり平和祈念資料館で、学徒たちの最後の記を読んだとき、涙がとまりませんでした。それは、かわいそうだとか、悲惨な事実がそこにあったからではなく、事前学習や今までには感じることはできなかった学徒たちの思いを、初めて感じ、伝わってきたからだと思います。その体験は、そこだけではありませんでした。

アブチラガマに入ったとき、急に空気が変わりました。今までに体験したことのないくらいの静けさと暗闇の中を歩きつづけていると、戦時中の人々の不安や悲しみ、恐怖などを鮮明に感じました。まるで自分が当時そこにいたかのように情景がイメージできたのはその時、今まで以上に当時の人々の気持ちになって戦争というものを考えることができたからだと思います。

私は、何も知りませんでした。当時の人々が望んでいた「平和」を、何も知らなかった私たちが生きています。しかし、今あるこの平和は、当時の人々が必死につないだからこそ、存在するものだったのです。

まだ、戦争を知らない人たちはたくさんいます。命の重みをわかっていない人も、たくさんいます。私は、今回の学習で平和の大切さや、命の大切さを学びました。今の私にできることは、その平和の大切さを伝えていくことだと思います。

平和を守り続けていくことは、私たちの使命です。その重要さは、戦争を知った人でないと、理解できないことだと思います。だからこそ私たちは、戦争を知らなければいけません。今、ないから関係ないのではなく、今ないからこそ、学ぶことが大切なのです。

平和

静浦小中一貫学校

9年

芹澤琴音

私の学校では、今年沖縄へ修学旅行に行った。楽しいというイメージのあった沖縄でよく聞いた言葉は、「平和」だった。

初めて行った沖縄。そこはやはり海がきれいで、自然豊かな所だった。住んでいる人も、すごく明るく元気な人ばかりだった。歌やおどりをやっている人もいて、にぎやかでいい場所だと思った。

今はそんなに明るい沖縄だが、昔は戦争が行われていた。1945年3月から7月まで行われた沖縄戦だ。地上戦となった沖縄戦は、大きな被害を受けた。

私の民泊した家の人によると、まず米軍は伊江島に上陸したらしい。多くの住民はガマに逃げ込みかかっていたという。実際に戦争の跡地に連れてってもらった。行く場所行く場所が衝撃的だった。ガマはとても暗く、建物には手榴弾が使われた跡や砲撃された跡が残っていた。こうして沖縄戦は伊江島を拠点とし進んでいった。

沖縄戦による被害はこれだけにとどまらなかった。次に沖縄本島に上陸した米軍は、南下を進めていった。住民や負傷兵は、病院の役目を果たすアブチラガマの中で身をひそめていた。アブチラガマにはひめゆり学徒隊という学生たちがいた。学生なのに、負傷兵の看病などを一日中し続けたと聞き、想像できない苦労があったんだなと思った。私がこの立場だったら、きっとたえきれなかっただろう。真っ黒で砲弾などの音が鳴りひびく中、人を救い続けたひめゆり学徒は、何があっても忘れてはいけない存在だ。

被害をうけたのは、物だけではなかった。この戦争で、米兵も含め20万人が亡くなった。「捕りよになるなら自決をしろ」、と教えこまれていたため、一般住民の自決があとをたたなかった。南下が進んでくるにつれ逃げ場の無くなった住民。国のため、天皇のためと言いながら自決していく姿を思い浮かべると、辛いと思うと同時に、なぜ今の日本のような考え方じゃなかったのか、不思議でしかたない。

私は戦争について、民泊先の人に聞いてみた。その人はお母さんが戦争を体験した人だった。昔戦争について、よく話を聞かせてもらい、今でも忘れないという。その話の内容は、米軍が伊江島に上陸してくるのが見えたことや、どこを見ても軍の人がいたこと、攻撃している音が鳴りやまなかったことだった。私は、その一つ一つの話に衝撃を受けたことを覚えている。でも、それ以上に忘れられないのは、その話をしてくれている人の表情だ。

時々笑顔も交えながら話してくださったが、その表情はどこか悲しそうにも見えた。話してくれたのは体験談ではなかった。何度も何度も基地の話をしていった。

「基地がなければ...、沖縄で戦争はなかったかもしれないのに。」

こうくり返していた。沖縄にある嘉手納基地は、アメリカ軍に使われていた。そして今も、範囲は狭くなったものの使われている。近くに住む人によると、とにかく騒音がひどく、物が落ちてきたりなどするのではないかと怖いらしい。これは、基地の近くに住んでいるからこそ分かることだろう。

さらに今問題となっている辺野古基地。沖縄の人は反対しているが、作業は進んでいる。このことに関しては、

「反対しても国の圧力に負けてつくられてしまうだろう。」

ということを知った。私は、もっと話し合いや意見交換をしないとだめだと思う。

今、日本は戦争をすることなく、生活をしている。学校に行ったり、友達と遊んだり、家族とすごしたり。こんな平和を守るためにも、二度と戦争をしない国をつくるのが大事であり、沖縄の人のためになると思う。

沖縄が私達に伝えたかったこと

静浦小中一貫学校

9年

竹内 静流

(なんで京都じゃなくて沖縄なのかな。) 私達の年から、修学旅行先が沖縄になった。私は正直沖縄より京都の方がよかった。でも、そう思っていたのは初めだけだった。沖縄と決まってから何時間も沖縄について調べ学習をしたり、どこに行くのかの話し合いなどを行った。結果、私達は修学旅行先で主に戦争に関わる場所へ行くことになった。

沖縄修学旅行を迎え、まず最初に行った場所はひめゆりの塔だった。そこでは戦争で亡くなった一人一人の写真や当時使用していたかばんや手術時に使うメス、服などいくつかレプリカのものもあったが、実物も展示されていた。資料館の出口の方に、実際に戦争を体験した人のインタビュー映像が流れていた。インタビューに答えている人の顔を見て、私は友が死んでしまった悲しさや思い出したくなかったという気持ちしか伝わってこなかった。その証拠に、話をしている一人一人の目からは涙が流れていた。他にもなかなか話そうとしない人もいた。「爆弾を落とされてすごい音がした。その時、隣にいた友達が...。」話をきいているだけで心が痛かった。それと同時に戦争というものを身近に感じた。

他にも、アブチラガマという洞窟に見学に行き、中を案内してもらった。

私は、洞窟の入口を見た時びっくりした。それは、入口が想像してた大きさよりずっと小さかったからだ。実際は少し体を小さくしないと入れないほどの大きさだった。入口から階段があり時間をかけて下り中に入った。入ってみると、驚くぐらい広かった。トイレや水をためる場所、他にも実際使っていたと考えられるものもいくつか地面に落ちていた。私達は一人一人懐中電灯で足元を照らしながら見学をしていた。しかし、全員が明かりを消すと真っ暗になり、目をつぶっているような感覚でびっくりした。当時は、この真っ暗で明かり一つない状態の中で生活していたと思うと一日一日をすごくつらい思いをしながら生活をしていたんだなと思った。きっと入口を狭くしたのは敵に見つからないためだったのかなと私は思った。戦争というのは、敵に見つかったら大変なことになる。だから静かに生活をしなければならない。となると、戦争を行っていた頃はこの真っ暗な洞窟の中で静かに生活していたことになる。そう考えると、戦争はつらい思いをしない人は誰一人いなかったという事が分かった。

私は、この沖縄修学旅行を通して戦争は二度としてはいけないと強く思った。きっと、戦争は私達が思っているよりずっと厳しい生活だったと思う。食べ物はなく体力もなくなり、ただただ戦争が終わるのを待つ日々……。しかも、このような生活をしていたのは大人だけではない。生まれてまもない赤ちゃんや子供、高齢者までもがつらい生活を送っていた。私達は学校で戦争について学んできた。しかし、実際に戦争が行われた沖縄へ行ってみると、戦争の重みやつらさが私が思っていたより大きかった。

私は、戦争に対する思いが変わった。今まで戦争というものを甘くみていた。修学旅行を終えて、もう一度戦争について考えてみると、私は怖いという言葉しか見つからなかった。そんな私達の戦争に対する思いを、たくさんの世代の人に知ってほしいと思った。これからの修学旅行先はきっと沖縄だと思う。だから沖縄へ行って感じたことを自分だけのものにせず、家族や友達など、たくさんの人に本当の戦争の恐ろしさを知ってもらい、今現在の生活が、どれだけありがたいかというのを知ってほしいと思う。

今回の旅行を通して、このようなつらい戦争の重みを一人一人が感じ、語りついで二度と戦争というものがおこらないようにしていきたい。そして実際に戦争を体験した人の気持ちを、これからもたくさんの人が受けついでいき、いつまでも「平和」というものを大事にしていきたいと強く思った。

平和な世界って何？
尋ねるとみんなそろってこう言うだろう
「争いがない世界」
ではなぜ争いがない世界は平和なのか
それは悲惨な思いをしないから？
または犠牲がでないから？

平和について考える
皆こたえは分かっているはず
なのに世界は平和にならない
友達がこう言っていた
平和とは実に単純で実に複雑

平和について考える
考えて出るこたえは同じ
多くの人が同じこたえでも
多くの人がどれだけ平和を望んでも
実現することのない平和な世界

平和について考える
平たく和むと書いて平和
みんな平等に落ちつける
みんなが望む平和な世界
力なんていらぬ世界
みんなの心が一つの世界
みんなが望む平和な世界

はたして日本はどうだろう
「日本は平和」
日本人の多くはそう思っているだろう
でも本当に平和かな？
平和な日本について考える
だれかが一方的に得をして
だれかが一方的に損してないかな？
力で決めず話し合って決めてるかな？
皆で力をあわせて助けあってるかな？

一人一人が平和な日本を想像したとき
みんなの前に平和が広がる

静岡大空襲から考える

原中学校

1年

高橋紀寿

僕は、戦争のことをよく知らない。しかし、戦争はたくさんの命を奪い、悲しみを生む、二度とくり返してはいけないことは知っている。でも、今も世界各地では、「紛争」「内戦」「テロ」等の名で戦争が絶えず起こり、多くの命が奪われている。

8月9日の新聞に次の記事があった。

「長崎 原爆投下72年」

という記事だ。この記事を読んでいくと驚くことがあった。「原爆死没者名簿に記された総数が17万5743人」と書いてあることだ。これは沼津市の人口約19万人とほぼ変わらない。沼津市民が原爆投下のあと2万人ほどしか生き残れなかったと考えると原爆の怖さを改めて思い知らされた。さらに生き残った人の中には後遺症で苦しんでいる人もたくさんいる。僕は、「戦争の悲しさを忘れない。」「一日も早く世界から核兵器がなくなって欲しい。」と黙とうをした。

僕はもっと身近な戦争を知るために静岡平和資料センターを訪れた。中に入ると、まず満州事変のことが紹介されていた。

(日本は満州からも攻撃されたのか。)

と思った。しかし実際はその逆で満州に日本が攻撃したと分かった。そこで今まで日本は空襲の被害国であったと思っていたが、日本軍が満州や中国の都市への空襲を何年にもわたり行い、加害国でもあったことを知った。もう少し進むと餓死した日本兵の写真があった。この写真があまりに残酷すぎて思わず目をそらしたくなった。しかも戦死者2300人のほとんどが餓死とあり想像するだけで戦争の怖さが分かる。展示室の奥へ行くにつれて静岡空襲についてのパネルが紹介されていた。グアム島を飛び立ったB29は、静岡地区上空に低空で侵入、123機で爆撃を開始した。瞬く間に火炎は静岡駅周辺から番町方面にも火炎の嵐が吹き荒れた。この時投下されたのは、M69焼夷弾とM47焼夷弾が合計868トン。約2時間で市街地の6割以上が焼失し、2000人以上の命が奪われた。街は完全に廃墟となった。このパネルを見たとき、あまりの無差別空襲のひどさを知り、目を疑ってしまった。

「こんな短時間でこれだけの命が...しかも、戦争に全く関係のない一般の市

民もB29によるターゲットに...」

「なぜ、どうして、何のために...」

ぼくは、くり返し考える。悲しみや苦しみ以外にいったい何が残るのか。戦争は、家族をバラバラにし、未来をうばい、希望をうばい、大切な命もうばう。戦争をおこさず話し合っ解決することができれば、戦争をおこさずにすむのではないか。自分の戦力を他国に見せつける必要は、ないのではないか。自分が持っている領土に満足し、今よりも大きな領土を求めず、平和に過ごすことが一番なのではないか。こうすることで、戦争を少しでも減らすことができると思う。

最後に戦争を体験した人が書いた体験画を見た。建物が燃える絵、防空壕の絵、けがをしている人の絵。こげて男か女かも分からない絵。すべてが忠実に再現されていた。写真では、空襲後の様子ぐらいしか見ることが出来なかったが、絵だからこそ、けがをして血まみれの人の絵や黒こげの死体は、いっそう残酷に思えた。まさに、戦争をその場で体験した人にしか、かけない絵だった。

戦争について知らなかった僕も、戦争を体験した人の絵、物、証言から残ぎゃくな光景を目の当たりにし、そのきょうふを真正面から受け止めなければならなかった。

終戦から72年経った今、戦争を体験した人が減り後世へ戦争を伝えることが困難となった。だからこそ、戦争を風化させないために戦争のことを知った僕が後世へ戦争の悲さんさを伝えていきたい。そして、世界から戦争がなくなり、世界が一日でも早く平和になって欲しい。この思いを胸に、8月15日、終戦記念日に黙とうをした。

平和な今だからこそ

原中学校

3年

三輪華梨

「戦争」とは何だろうか。思えば、どんな辞書でも必ず載っているだろうこの言葉を気に留めたことは、中学三年生になるまでなかったような気がする。今年学校で、戦争を扱った物語や歴史、合唱曲などを勉強していて、戦争について様々な角度から深く考えてきた。

国語の授業では『黒い雨』を学習した。今から72年前の8月6日午前8時15分、広島に原子爆弾が投下された。当時まだ「新型爆弾」と呼ぶしかなかったこの得体の知れない爆弾一発で、広島街は一瞬にして消え、約二十万人もの市民の尊い命が奪われた。この時被爆した一家三人が記した日記をもとに再構成した小説が『黒い雨』だ。爆心地からやや離れた地点で被爆

した人の体験や見聞が多く、原爆による外傷はもちろんだが、肉体的にも精神的にも壊され絶望に追い込まれていく人々の様子がある意味淡々と描かれていた。登場人物は皆、何が起きたのか、どんな被害が出ているのかを知る術がない。当然だ。爆心地付近にいた人たちは、ほぼ即死だったのだから。

私は、原爆について少し調べてみた。広島に投下されたのは「ウラン爆弾」と呼ばれる核爆弾で、核分裂時に発生したガンマ線という放射線は、掌に当てれば細胞が死んで穴が空くといわれるレベルだったそうだ。爆心直下の人々は、この放射線で一秒にも満たない間に全滅したともいわれる。その後、地上でも何千度という凄まじい熱線と爆風で、吹き飛ばされ、焼かれ、炎と叫び声に包まれた広島に、30分後には大量の放射線を含んだ黒い雨が降る。洗っても洗っても落ちないねっとりとした黒い雨は、北西方面へ長径30キロの円状区域に降り注いだ。「恵みの雨」とは言うが、これはまさに「悪魔の雨」。家族の安否がわからず探す人々や救助にあたる人々まで、何の罪もなく何も知らなかった人たちをのみ込んでいったという。

言葉ではとても表現できない数多くの困難を心身にもたらした原爆。その被害は、長い年月を経た今現在も癒えることはない。この、人々にただ悲しみや苦しみ、怒り、辛さ、恐ろしさだけを与えた原爆というものを、私たちは決して忘れてはならない。私は心からそう思わずにはいられなかった。

しかし、世界には今も、原爆のような核兵器を保有している国がたくさんある。世界の中心となっている国々をはじめ、1万発以上もの核兵器があるらしい。戦争は二度とあってはならないと誰もが思っているはずなのに、これでは、絶対にもう起こさないと切り切れる状況ではない。そもそも、世界に核兵器など本当に必要なのだろうか。私はそうは思わない。唯一の被爆国で核兵器のむごさを知っている日本だからこそ、核兵器など使ってはならないと叫ぶことができ、「非核三原則」を国是としてきたのだ。日本は、核兵器の廃絶を、世界に向けてもっともっとアピールするべきだと思う。

もちろん、この世界から核兵器がなくなることだけで「平和」が訪れるわけではない。世界のあちこちで、民族や宗教の違い、国の利権争いなどが原因となって、テロや紛争、内戦が起き、毎日のように痛ましいニュースが飛び込んでくるからだ。確かに、こういった争いをなくすことは想像以上に難しい。しかし、世界中の人々が戦争に向き合い、互いに譲り合い協力し合って解決に努めていくしか方法がないこともまた事実だと思う。その先頭に日本が立つこと、それこそが、亡くなった無数の方々の願いではないだろうか。

戦後72年。今の日本は平和で、自分は戦争に関わっていないからどうでもいい、のではない。平和な日々を生き、戦争に関わっていないからこそ、ゆっくり考えることができるのだ。「戦争」とは何か、「命」とは何か、周

困の人とともにじっくり考え、世界では何が起きているのかを正しく知ることが大切だ。そのとき初めて、「平和」な世界に一步近づくことができると思う。

私は、もっと戦争について知り、自分に何ができるか、自分のこととして考えたい。そして、平和を願う心を持ち続け、夢をもって生きていきたい。いつか世界平和が訪れると信じて。

平和を叫ぶ

原中学校

3年

山本優帆

人類は、太古の昔から戦争を繰り返してきました。日本も72年前まで戦争をしていたし、世界に目を向ければ、今も毎日どこかで戦争が続いています。なくなる日など来ないのではないかと感じてしまうほどです。

しかし、一方で、戦争を体験した多くの方々が、自らの体験を語り伝え、全世界に向けて反戦を訴え続けています。母から長崎の原爆資料館での話を聞いていた私は、国語の授業で『黒い雨』を学習したり、社会や音楽の授業でも戦争について学んだのを機に、この夏、広島を訪れました。

1931年、満州事変が起こり、その10年後、日本がアメリカの真珠湾を攻撃したことで太平洋戦争が始まりました。戦局は瞬く間に厳しくなり、日本の敗戦がもはや決定的であった1945年8月6日、広島に人類史上初めて投下されたのが、悪魔の兵器、原子爆弾でした。

幸いにも私は、被爆した方のお話を聞くことができました。その日も、市民は普段と何ら変わらない朝を迎えました。8時15分、目がくらむ閃光を受けたと同時に体がふわっと宙に浮き、凄まじい爆風で体が吹き飛んだそうです。爆心地から半径500メートル以内にいた人々はほぼ即死、即死を免れた人も爆心から近ければ近いほど症状は重く、数日以内で死亡する人も多かったです。投下直後の広島は、血を垂れ流し皮膚をぶら下げて呻きながら歩く人や黒焦げになった死体であふれ返り、まさに地獄絵図だったといえます。私には想像することすら難しい光景で、体が小刻みに震えて止まりませんでした。

私はその後、展示されていた資料を見ました。被爆の全体像や原爆投下に至る道のりの説明に続き、遺品や遺影、そして、傷ついた広島の人と街の写真や市民が描いた原爆の絵が展示されていました。その写真や描かれていた絵には、火傷や裂傷にあえぐ一般市民の姿、そして破壊され尽くした、かつて街だったものがありました。中でも、私の目をとらえて離さない一枚があります。それは、爆風によって倒壊した民家の下敷きになった子供を助け出

そうとしている母親の絵です。火が四方から迫り来る中、自分を犠牲にしても助けようとする姿に心を打たれました。

『黒い雨』では、同様の状況で、最後は息子を見捨てて自分だけ逃げた父親が、幸運にも逃げ出すことができた息子と再会したという、気まずく重苦しい場面が描かれていたことを思い出し、この絵の子供がこの後無事に生き延びていることを願いました。私だったら、自分の命を犠牲にして、恐怖と戦いながら救助し続けるなんてことができるだろうか……。下敷きになったまま炎の中に一人残される家族の心情を思い、自分の命は顧みず行動した姿に、涙があふれました。

また、約2万点におよぶ遺品からは、原爆で亡くなった方々や残された遺族の方々の、核兵器廃絶への強い願いが伝わってきました。特に、私と同年代である中学生の遺品には、あまりにも突然に、夢や希望に満ちあふれた人生を奪われた無念さが、焼け焦げてぼろきれになった衣類にしみついた血痕となって残されているような気がしました。そしてまた、我が子を失った母親の深い悲しみを訴えているように思えました。どの遺品からも、被爆し人生を奪われた人たちの無念さと、ただ生きたいと願う執念にも似た悲痛な思いが伝わってきます。まるで、遺品の横で亡くなった持ち主の魂が叫んでいるようで、胸が締めつけられました。

戦争や核兵器を完全になくすことは、とても難しいことです。世界には現在、約一万個の核兵器があるといわれ、中には、広島に落とされた原爆の八倍もの威力をもつ水爆もあるのだそうです。爆弾を製造する技術は、72年間で飛躍的に向上しました。技術や科学の進歩は、人類の生活を良くするためにあるべきなのに、一部の国々では、他国に対する威かくや破壊など攻撃のために技術を向上させています。

それでも、私たち日本人だけは、広島・長崎に落とされた原爆のことを決して忘れてはいけないと思います。被爆国は日本だけなので、核兵器がどんなに恐ろしく、被爆がどれほど苦しいものを訴えられるのは日本人だけです。もう二度と、あのような悲劇が起きないように、私はこれからも戦争や核兵器について学び、日本に生まれた戦争を知らない若者の一人として、未来へ語り継いでいきたいと思います。

「真の平和」とは

浮島中学校

3年

鈴木陽仁

「平和とは何ですか。」

と聞かれた時、「戦争がない」、「テロがない」と答える人は少なくないと

思う。辞書にも「戦争や紛争がない」ということが書いてある。僕も以前は、それだけだと考えていた。

しかし、「戦争や紛争、テロ等がない」だけでは、「平和」とは言えないと僕は考える。人間が「平和」と感じ、安心して生活していくためにはその他に必要なことがあると考える。

まず、戦争やテロ等がないことが大前提である。戦争が起きていたり、テロが多発していたりするならば、誰も「平和」とは感じないだろう。戦争がないことが重要なのは、それが「命の奪い合い」だからである。日本もかつて、戦争を経験し体感したことがある。「核の恐怖」である。日本には8月6日に広島、9日には長崎に原子爆弾が投下された。それらは、一瞬にして多くの尊い命を奪った。原爆の影響で亡くなった人は20万人以上になる。これは、二度と繰り返されてはいけない。そのため、日本は訴え続けなければいけない。そして、卑劣で悲惨な戦争が起きないように、尽力すべきである。

そして、もう一つ必要なことがあると考える。人が「平和」であることだと考える。辞書にはもう一つ「平和」の意味がのっている。「心配やもめごとがなく、おだやかなこと。」とある。戦争等がない状態が「平和」ならば今の日本は「平和」と言える。しかし、心配やもめごとがない状態が「平和」ならば、今の日本は「平和」ではないと思う。一人一人が「平和」ならば日本では、いじめや、それによる自殺は起こり得ないはずだ。しかし、それは実際に起きている。平等ではないから起こるのだ。世界でも差別されている人はいる。しかし、差別がある世界は「平和」ではない。一人が「平和」、つまり穏やかで差別をしないならば、その人から「平和」が繋がっていくと僕は思う。

皆が平等な世界が実現すれば戦争やいじめも無くなると思う。「真の平和」とは、皆が平等で調和のとれた世界だと考える。それを実現するために、まず最初に、自分自身が「平和」であることを意識することが大事だ。つまり、一人一人の努力が、世界を「真の平和」へと導くと僕は信じている。一人の努力は小さいかもしれない。しかし、たとえ小さな一歩でも、それが「真の平和」に繋がる。そう信じて、小さな一歩を踏み出して欲しい。

平和を信じて

浮島中学校

3年

富 樫 みさと

去年の夏休みに、私は一週間入院していました。初めての体験で、不安なことばかりでしたが、その不安の中から、一人の女医さんが私を救ってくれ

ました。その先生は私の主治医で、とても丁寧に私の病気について教えてくれたり、採血のときに、スマホでけっこうな音量で音楽をかけながらやってくれたり、面白く、優しい先生でした。そのおかげで私は病院で安心して過ごすことができるようになったと共に、私もあの先生みたいな医者になりたいと思うようになりました。

日本中には、私の病気なんて全然小さいものだと思える辛い病に侵されている子供がたくさんいます。その中には、治すことができない病で亡くなってしまった子や、今も闘病生活に苦しんでいる子など様々です。それでも、昔と比べると、現在は医療が発達し、亡くなってしまう人の数も少なくなりましたが、現在でも解明されていない病で完治することができないということも、少なくありません。その病に侵されてしまった子供達は、なぜ自分だけこんなことになったのか、治すことはできないのだろうか、毎日思っているはずで、それだけでなく、その子の両親も、絶望的な感情になることでしょう。

日本は平和な国と言われますが、私は平和とは思いません。病気で亡くなってしまうことは仕方がないと思います。しかし、最近、親が虐待をし、自分の子供を自らの手で殺めてしまうという事件があります。この現実、私はとても驚き、なぜ自分の子にそんなことができるのか、不思議でなりません。病気で苦しんでいる人にとって、生きることがどんなに幸せなことか、それも考えずに人を殺めたり、傷つけたりする人を許すことができません。日本はこの問題に真剣に向き合い、改善させていく必要があります。

私はこういう問題が少しでも減ったら良いと思います。そして、意味もないことで、人から傷つけられて、辛い思いをする人がいなくなって、全員が心から平和だと思えるような環境になることを望んでいます。

それから、私は将来、医者になりたいです。できれば、今、解明されていない病などで苦しんでいる子供たちも救うことができるような医者になりたいです。ただ救うだけでなく、私が入院したときに、主治医の女医さんを見て自分もなりたかったように、私も自分が診た子が自分と同じようなことを思って私みたいな医者になりたいと思われるような人になりたいです。

このようなことの連続で、世の中が平和になってほしいです。

私たちの役目

今沢中学校

2年

石川

楓

1939年、9月。悲惨で長い戦いが始まった。

私はこの戦いで、当時の人々が味わった苦しみ、悲しみ、痛みを知らな

い。もちろん、テレビでの再現ドラマを見たり教科書で勉強したりしてどのような戦いであったかは理解しているつもりだ。

私の母方の曾祖母が唯一、私のまわりで戦争を語れる人物だ。

曾祖母は当時、東京に住んでいた。曾祖父はガラス職人だった。赤紙が届けられた時には、子どもが一人おり、曾祖母のお腹には新しい命がやどっていた。幸せな生活を送っていただろうに、赤紙が届いた時の二人の心情はどのようなものだったのか、想像も難しい。

ちょう兵される朝、家族との別れぎわを、曾祖母は、今でも目に焼き付いて、忘れられないそうだ。涙が止まらず、曾祖父の姿が見えなくなるまで見送ったそうだ。

一方で、今は亡き曾祖父の話は聞くことができないが、最後になるかもしれない妻との別れ、愛しい我が子、きっと涙をこらえその姿を目に焼き付け、戦いに出掛けていったのだろう。自分に置き換えるとしたら、自分の一番の宝物である家族と二度と会えないかもしれない別れがおとずれるとしたら、ぞっとする。こんな悲しみは耐えることができないであろう。

曾祖母は、戦争の話をたずねると毎回同じ話をする。終戦から約七十年経つというのに、鮮明に覚えているのであろう。私の曾祖父の話だ。曾祖父は無事、帰ってくることができたのだ。

曾祖父は、海軍として戦艦に乗っていた。ある日、アメリカ軍の戦とう機からの爆撃にあった。そして、甲板で作業していた曾祖父は足を負傷したのだ。足がちぎれてしまいそうなほどの大けがだった。しかし、不幸中の幸いだった。命に関わる大けがをしたことにより、曾祖父は、その後の曾祖母との人生を歩むことができたのだ。無事に帰って来た時曾祖母はうれし涙が止まらなかったそうだ。曾祖父も、また愛しい我が子をだき上げることができ、きっと喜びに満ちていただろう。

曾祖母はいつも言う。

「おじいちゃんが生きて帰っていなかったら、あなたたちは居ないのよ。」と。

今年の夏、広島原爆資料館、原爆ドームにおとずれることができた。まだまだ知らない世界が広がっていた。目をおおってしまいたくなるほどの残こくな写真。実際に兵隊が使用していたという水とうやくつ。黒こげに焼けた、まだ食していない弁当。死んだ弟なのであろうか、子供をおんぶしている兄。原爆投下された時刻で止まっている時計。何とも言葉を失った。この現状を同じ人間がたった70年前に味わったのだ。

私は曾祖母の話を聞くたびに思う。この悲惨な戦争の話を風化させてはいけない。未来に継いでいかなければ……。

それが私たちの役目。

もう七十年

今沢中学校

3年

石田 琉菜

1945年8月15日、日本の終戦の日から今年で72周年になります。72年後にもなると戦争中の日本を知っている人はどんどん減っていき、それらを現代に伝えていくことはとても難しくなっていました。伝えていかないと人々は戦争を忘れていきます。戦争の記憶は絶対に忘れられてはいけない、これからもずっと次の代へと伝えられていかななくてはならないものです。しかし、それすらも忘れていく人達がでてきていると私は思います。

昨年の8月15日の終戦記念日、ニュースではたくさん戦争について取り上げられていました。戦争についての資料館や原子爆弾が落とされた広島の実験ドーム、戦争を生きぬいた方からの戦争中のお話。とても明るい話題ではないけれど、私達がしっかり聞かなくてはいけない話ばかりでした。しかし、私はSNSで「もう70年も経っているのだからそんなに掘り起こさなくてもいいだろう」という言葉を見つけました。私は、とても衝撃でした。たしかに「もう70年」です。ですが、それだけ年月が経っているからこそ忘れないために終戦記念日があり、そんな日に思い出すことが大切なのだと思います。今では考えられない、私には想像もつかないくらいひどい状況の中、いつ終わるのか分からない恐怖の中、生きてきた方達がすでに失われようとしています。私の祖母の姉は、そんな中を生き抜いた一人です。話を伺ったところ、配給などでは食料は手に入らず物々交換や闇市でなんとか食料を得ていたとおっしゃっていました。今は、とても便利な時代になりそこまで困ることはありません。なので、戦争に対する意識や関心が薄れてきてもしかたがないのかもしれない。だからこそ、忘れてはいけないし何度でも戦争について学び伝えるべきなのです。映画や本、インターネットなど戦争を深く知る方法はいくらでもあります。知れば知るほど戦争の恐ろしさが分かるはず。忘れてはいけない大事なことに気がつくはず。辛い過去を掘り返すことは決して楽しいことではないけれど、それ以上に大切なことを戦争は教えてくれます。

戦争によって日本だけでなく、世界中の人達が犠牲になったこと。今では考えられないほど過酷な生活があったこと。70年も経ったからこそ分かったこと。それらは、私達にとって忘れてはいけない過去です。「もう70年経っているのだから」だからこそ掘り起こし、戦争を深く知り、これからの繋げていきます。人々が戦争に感心をもち学ぶことがこれからの平和な日本に必要なことだと私は思います。80年でも90年でも100年でも、これ

は変わりません。一人一人ができることは小さいけれど、その一人一人がもった戦争に対する関心が増えて大きくなれば、何十年でも平和な日本は続くと思います。

そのために私は、戦争をより深く知り伝えていくということをしていきたいです。

語り継ぐ、平和

今沢中学校

3年

新居田 理子

毎年、八月が来ると考えさせられる。

「この世に戦争と核兵器が存在しなければ良いのに。」

戦争は失うものが多すぎて、何一つ良いことなんてない。72年前のあの日、広島と長崎に原爆が投下された。私の祖父母は広島生まれで、小さい頃からこの話をよくしてきたと言う。実際、私も祖父から原爆が投下された時の話を聞いた事がある。前に、テレビで見たが、広島と長崎に原爆が投下された日を答えられない人が多かった。時代がそうしてしまったのか、私達の暮らしている日本が平和なためなのか。でも、この原爆の日は決して忘れてはならないと思う。

当時の人達の事を考えると胸が痛む。国のために自分の命をささげる事が当たり前であり大切な家族や友達と別れ、一生をささげる。そんな悲惨な戦争があったにもかかわらず、今だに世界のどこかで戦いが起きている。そのたびに多くの犠牲者が出るが今の私達にはとても考えられないことだ。

最近ニュースでも核・ミサイル・テロといった言葉を聞かない日はないくらいに世界は深刻な状態だ。核やミサイルの開発もやめようとしないうし、テロも静まりそうにない。唯一の被爆国である日本が被爆体験を発信しているのに何とも思わないのか、このままでは私達世代が戦争を体験するのも時間の問題のような気がして恐ろしい。

平和とは、戦争がなく安心して暮らせる環境のこと。世界の人々は、なぜ平和という一つの目標に向かって生きていけないのか、不思議でならない。どうしても世界規模となると人種もさまざまに人種差別の問題や宗教などの違いもあり、考え方が対立することも多く、支配したい人達がいる分、複雑だ。それでも武力ではなく、対話をすることで少しでも理解し合えると思う。

平和をつなぐ被爆体験を語れる人達もだんだん高齢になってきているのが現状であり、平和を守るために私達は、これからどうすれば良いのか授業の中でも話し合っていく必要があると思う。

実際に広島の高校生は日米交流を通して平和の大切さや、核廃絶を訴えているようなので私達も高齢の被爆者に代わり、世界に向けて少しでも平和の大切さについて発信できるよう勉強して活動をしなればいけないと思う。日本を訪れる外国の若者が平和について真剣に考えているのに対し、一部の日本の若者はなぜ興味さえも示さないのか不思議を通りこして残念な気持ちでいっぱいだ。

外国人が広島を訪れるのが年々増えてきている反面、日本人が原爆について学ぶことを目的に広島を訪れるのが減少しているのは悲しい事だ。私はもっと多くの人が広島・長崎を訪れて自分の目で見て、感じて確かな情報を得て、自分の国で語り継いでほしいと思う。世界中の人々が手を取り合い話し合いを大切にし、理解することが出来れば戦争と核兵器のない安全で平和な未来がやってくると思う。そう信じて、私も祖父から聞いた戦争を語り継ぎたいと思う。

沖縄の思い

門池中学校

1年

萬代 まるみ

8月中旬。私たち家族は沖縄へと降り立った。その時の沖縄の空は青くすみ渡っており、すがすがしかった。沖縄へ来るのは二度目だが、それでもやはり沖縄の雰囲気には圧倒される。テレビで見るより何倍もいい所だ。

せみもうなって鳴かないほどの蒸し暑さの中、まずは座間味島の近くにある阿嘉島へ、海水浴をしに向かう。かつて、ここも沖縄戦で多くの犠牲者が出た場所の一つで、米軍の沖縄上陸の第一歩となった島だ。しかし、空のように、いや、それ以上に青くとう明なその海は、戦争のことはもう波でとくに打ち消したよ、とでも言っているように、静かだった。

海水浴を終え、帰り道を歩いていると、

「こんにちは」

と笑顔であいさつをしてくれる人がたくさんいる。

(ここには、優しくて明るい人たちがたくさんいるんだ)

そう思うと同時に、

(どうしてあんなにもつらい過去があるのに、こんなにも明るくいられるんだろう?)

という疑問がうかんだ。風化してしまったのか。それとも、その記おくを無くそうとでもしているのか.....。

そんな疑問を解決するため、私たちは次に沖縄本島へ向かった。本島には、戦争を物語る場所が多くあるため、疑問解決につながるかもしれない。

行ったのは、「旧海軍司令部壕」、「ひめゆり平和祈念資料館・ひめゆりの塔」、「平和祈念公園」の3ヶ所だ。どの場所も、「この記おくを決して忘れてはいけない」と語りかけているようだった。自決をするための手りゅう弾のあと、私とほとんど変わらない歳の子たちの遺影、これほどまでというほどの数の戦没者の名前……。どれだけ戦争が悲さんなものかを思い知らされた。ごくふつうの沖縄市民が戦場にかりだされ、多くの人が命を落としていったのだ。

ひめゆり平和祈念資料館を見ていたとき、ひめゆり学徒隊は、恐らく戦争をするのは正しいことなのだ、と信じ、自分たちの青春をも捨て必死に自分の役割を果たしていったのだろうということに気がついた。私だったら、もちろんもっと勉強したいし、遊びたい。しかし、ひめゆり学徒隊の子たちは、たくさん勉強してたくさん遊ぶことのできる、まさに「これから」という時に命を落としてってしまったのだ。

そう考えると、私にあいさつをしてくれた多くの人たちの笑顔がちがった意味をもって思い出された。彼らは戦争のことを知らなかったのでも、なかったことにしようとしているわけでもない。沖縄のため、日本のために命をかけ、戦争を行ってはいけないと身をもって教えてくれた先祖の「生きてくても生きることのできなかつた思い」を受け、悔いのないように生きているのだと思えてきた。

私たちが生きている世界では、まだまだ戦争や紛争が後を絶たない。こうやって、多くの人たちがその悲さんさを声の限りに伝えているにも関わらずなぜなくなるのか。それは、周りが見えていないからではないかと思う。沖縄戦では、一つ一つの命がまるで流れ星のように、消えてってしまった。他国と意見の食い違いにより、緊張関係にある国々。自分の国を守ることはもちろん大切だが、自分の主張ばかり通すのではなく、周りを見て、自分以外の人はどう思っているのか、どんな状況におかれているのか、その行動をとるのにはどんな理由があるのか、という当たり前のことを考え、話し合う必要があると思う。

しかし、ここで私たちが、「中学生だから関係ない」や「政治家や国同士のことだから口は出せない」などと甘く考えていると、きっとこの世界はいつまでもたっても変わらないだろう。このような時だからこそ、今の私たちに何が必要なのかを考えていくべきなのだ。ふだんの生活でも、人との価値観のちがいをしっかりと意識し、そのことに興味を持てるようになれば、きっと人々は相手を尊重し、平和な世の中を創りあげていけるだろう。

私は、今回の旅行で学んだことや考えたことを、しっかりと胸に焼きつけ、これからの平和のため、他人事にせず、しっかりとこのことに向き合っていきたい。

もっと日本を好きになりたい

門池中学校

3年

山田七海

平和とはなんだろう。私は平和について深く考えたことがなかった。私を含めて現代の人々は、好きなことをすることができたり、好きなものを食べることができたりする。ほとんどの人が毎日を楽しく過ごしている。私はこんな毎日がこの先変わらずやってくることを「あたりまえ」のことだと思っている。そんな平和ボケをしている私たちに、もしも戦争というものが立ちだかったら、どうなるのだろうか。終戦から70年経った今、戦争を経験した人が減っていく中で、今の平和な日本に平和がなくなるなんて想像できる人はいるだろうか。社会の教科書に載っている戦争中、そして、戦後の人々の姿や街の景色は、たった一部のことで、実際はもっと想像できない悲惨なことが、そこでは起こっていたのだ。社会の授業でも、先生の暗いトーンで話す戦争の事実を聞いて、いつもパワフルな私のクラスの雰囲気は一気に重くなった。戦争以外にも、日本には多くの人が犠牲となった出来事がある。中でも、私の身近で、最も印象に残ったことは、東日本大震災だ。まだ私が小学校低学年だったときのことで、何年も経った今でも強く覚えている。親戚の人の多くが東北に住んでいたこともあり、被害状況もテレビ以上に詳しく教えてもらって、小さな地震にしか経験のない私に、地震への恐怖が生まれた。それと同時に誰のせいにもできない東日本大震災とちがって国と国、人と人との争いによって多くの犠牲者を生み出した戦争は、あってはならないものなんだなと思った。あと、私が今でも思い出してしまう、東日本大震災のことと同じように、戦争を経験した人が私同様になってしまうことの原因が分かった。この時期になるとよく、戦争を取り上げたテレビ番組を見かける。日本は世界で唯一の被爆国である。だから、さまざまな国の人が広島や長崎を訪れている。テレビでその人たちがインタビューをされているのを多く見かける。私は、アメリカから来た人のインタビューが心に残った。その人は最初、日本に原子爆弾を落としたのは日本が戦争を止めなかったからという理由だと、学校で教わったと言っていた。しかし、広島原爆ドームや、資料館をみて、母国のやったことは本当に正しかったのだろうか、と言っていた。正しいと言う人も多くいる中、本当に正しいのかどうなのか考えてくれる外国人がいて私は救われた気がした。前アメリカ大統領の行動に対して、泣いて嬉しそうにしていた人々がテレビに映っていた。その人々は被爆者だった。私がアメリカの人のインタビューを見たとき以上にその人たちは嬉しそうにしていた。

70年前の日本では、私たちの信じられないことが起きていた。「戦争」という目で日本を見てみるとその存在は遠いもののように思える。日本に生まれたからには、戦争について考えなければいけないなと思った。今の日本なら、戦争なんてもうやらないだろう、と言う人がいる。しかし、私は、どんな平和な国でも、戦争が起こる可能性があると思う。それは、今の日本の地で昔、亡くなってしまった人々が命を落として教えてくれたものだと思う。だから、今こうやって好きなことができ、「あたりまえ」のように生活できていることを大切に一日一日を大切に生活していきたいと思う。そして、過去にあった日本の姿を知り、もっともっと日本を好きになりたい。

平和への一步は私達の努力

長井崎中学校

2年

大村 恭花

「戦争は、言葉では言えない恐ろしさだよ。何の罪もない人がどんどん命を落としていくのだから……。」

祖母は戦争について、私にこのように述べました。私も同じように思いました。

(何の罪もない人達が死ぬなんておかしい。現代の日本では考えられない……?)

私は気がつきました。今、この瞬間も戦争をしている国があることに。そんなことを考えているうちに、日本では、今までどのような戦争が行われたのかが気になってきました。

私が戦争について情報を入手してきた中で一番心に響いたものは、戦争のことをまとめたテレビ番組です。中でも一番印象強かったのが、神風特攻隊についての特集です。神風特攻隊は敵軍のところに飛行機で突っこんで攻撃する戦い方だそうです。もちろん生きて帰ることなど不可能です。そして、その人たちが書いた「最後の手紙」も紹介されていました。自分の人生を振り返っているもの、親への感謝の気持ちやあやまっているものなど、隊員の最後がさまざまな形で伝えられていました。国のために自分の命を落とすなんて、今の日本では考えられません。選ばれた人の家族、友人、知りあい……たくさんの人の悲しみや苦しきは、はかりしれません。

でもこの地球上では、戦争やテロなどで今もたくさんの人が亡くなっている国があります。私たちの何十倍、何百倍、何千倍という悲しみや苦しみを味わっている人が、今この瞬間にも地球上に何百万、何千万といるのです。

こんなに苦しんでいる人々がいる中で、私達に何かできることはないのでしょうか。

日本は現在、世界の国々と比べるととても平和な国だと思います。では、なぜ日本は今とても平和な国なのでしょう。私は、昔の戦争があったからだと考えます。行きたくなくても戦争に行つて国のために血を流した人がたくさんいて、国内でも、空爆、原子爆弾を落とされ、一瞬にしてたくさん命がうばわれて……。このように様々な経験をしてきたからこそ、今の平和な日本があるのではないのでしょうか。

では、その経験は日本の平和のためだけに生かすものなのでしょう。日本だけがその経験を生かせば良いのでしょうか。私は、そうは思いません。戦争を体験した国は多くても、これほど多くの経験をした国は他にあまりないと思います。原爆や空襲、自決……。この経験と、その悲しみを、今、戦争している国、戦争への一歩を踏み出そうとしている国などに伝えていく必要があると思います。戦争の恐ろしさ、怖さをたくさん体験した日本にしか伝えられないこともたくさんあると思います。だから、まだ戦争を体験した人が生きているうちに、若い人たち、日本の未来を担う子供たちに、戦争の恐怖や悲惨さを教えていく必要があると思います。そして私たちは、その教えてもらったことをどんどん世界に発信していけばよいのではないのでしょうか。いくら戦争をして、どんな作戦を使つても勝ちたいと思っている国の人があつたとしても、日本がやられた原子爆弾の恐怖や惨状を日本人が必死に伝えれば、多くの人々の心を動かして、思いやりの心を持たせることができるはずです。戦争をしようと考えてる人たちの心に思いやりの心が生まれれば、対戦相手の国のこと、自分たちの国のことなどを考えることができ、戦争やテロリズムなどをやめようと思うようになると思います。やがて地球全体が平和で包まれるのではないのでしょうか。

平和な地球をつくるには、一刻も早く戦争を止めなければなりません。未来の日本を担う私達が戦争について深く考えることが、平和への一歩なのではないのでしょうか。

私は戦争を実際に体験していないので、本当の戦争はどのようなものなのか分かりません。でも、私達の住む日本が大変なことをしてしまったのは確かです。どうして日本は、アメリカと戦争してしまったのでしょうか。考えても私には分かりません。それでも私は戦争のことを少しずつ考えることが、未来の平和をつくっていくと思います。これから先は、戦争やテロリズムなどのニュースを頭の中に入れてたりしながら、私も平和の一歩に協力していきたいです。

夏に毎年行われている戦争を特集した番組。それを見ていて僕は、驚いたことが二つある。まず、一つ目は、戦地から家族に手紙が送れたということである。もう一つは、第二次世界大戦で日本に勝利したアメリカにも、被害が出ていたということである。

第二次世界大戦中、戦地に派遣された兵士は、ビルマや満州から家族に手紙が送れたそうだ。そして、戦地から送った兵士たちは、家族からの手紙が返ってこない、何通も何通も送っていたそうだ。なぜなら戦争中だったので、もう家族が死んでしまっているのではないかと心配になったからだ。

また、戦地からの手紙には、あまり文字は使わず絵で戦地のことを表わして手紙を書いていたそうだ。なぜなら、戦地のことを言葉で表わすと、そこを黒くぬりつぶされてしまうからだ。それは、戦地のことを書かれてしまうと、不利な戦況が知られてしまうため、軍は知られないようにしたからである。ぼくは、このことを知って、まず驚いた。でも、この手紙があったから、戦地に行った兵士たちは生きて帰ろうと強く思っていたのだと分かり、納得した。なぜなら、戦地で一人だけで生き続けるのは、難しいけれど、待っている家族の思いが分かれば、生きて帰ろうと思えるからだ。

また、勝利したアメリカにも被害がでていたと知り、僕は本当に驚いた。これまで僕は日本の長崎や広島だけが原爆をおとされて、大きな被害がでたと思っていた。でも、実際には、アメリカでもがんなどの被害がでていた。それは、長崎や広島の前爆のおよそ五百倍の前爆が実験としておとされていたからである。その近くに住んでいた「風下の人々」は、ほこらしく丘から原爆を見ていたという。そして、その家族の子ども6人のうち、5人ががんで亡くなった。実験が行われていた時期に亡くなった人たちのおよそ40パーセントから45パーセントががんによるものだったそうだ。今でもアメリカ全体と比べるとその村の発がん率はかなり高いという。

この話を知って僕は、戦争で被害を受けるのは、敗戦国だけではないと分かった。勝利した国にも何らかの被害は、残るのだ。

現在も、核実験を活発に行っている国がある。それは、北朝鮮である。北朝鮮は、地下で行っているから国民に害はでていないと言っているが、実際には、吉州郡で鬼神病またはおばけ病が流行っている。この病気は、治せなかった。だから、脱北者が出たり、韓国ににげる人もいた。鬼神病の原因として、吉州郡の地下水をそこに住む人々が飲んだことがあげられるらしい。その人たちは、頭痛や腹痛をうったえた。だが異常なしといわれた。

北朝鮮には、もう核実験をやめてもらいたいと思う。なぜなら、実験しているところで被害が出るからである。そして、アメリカも核で攻撃してしまうかもしれない。そうすると、世界の様々な国に被害が出てしまうかもしれ

ないからだ。

ぼくは、「戦争で被害があった。」という、戦争で負けた国を思い浮かべていた。でも、被害が出るのは、負けた国だけではない。勝った国でも何十年にもわたる被害が続くのである。その原因をつくる核は、現在世界に1万5000千発以上あるそうだ。特に、ロシアやアメリカは、5000発をこえるほどの核兵器を保有している。僕は、世界中の核をゼロにしていきたい。そして、核があるのは、戦争があるからだ。僕は、改めて戦争をしてはいけないと思った。

沖縄で学んだこと

市立高校中等部

2年

川口美空

沖縄。それは私たちにとって夢の舞台であり、ずっと目標にしてきた場所です。なぜなら、沖縄でバスケットボールの全国大会が行われるからです。そして、私たちは全国大会に出場することができ、また、ベスト十六という結果を残すことができました。試合が終わった後、私たちは沖縄を観光しました。そこで私はショックを受けました。

私たちは、首里城と識名園という、世界遺産にも登録されている美しい沖縄の名所を見学しました。とても華やかで景色もきれいで感動していましたが、私は事実を知ったとき、驚きとショックが混ざった不思議な気持ちになりました。なぜなら、首里城と識名園は両方とも、戦争でほとんどが失われてしまっていたからです。私は、沖縄で戦争があったということはテレビなどで流れていたのを知っていたのですが、今まで戦争は私と関係がないとか、なんだか遠い話のように感じていた部分がありました。戦争という恐ろしいものから逃げていたのかもしれませんが。沖縄から帰ってきた後も戦争のことが気になっていたの、私は沖縄でおこった戦争について調べました。

沖縄戦は、今から72年前の1945年に日本軍と米軍の間で始まった最大で最後の戦闘です。死者は当時の県民の四割近い、20万人を出し、幼い子供や女性も多く亡くなりました。また、ひめゆり部隊という当時16才であった女学生240人のうち、半分以上の136人が殺害、もしくは自決で命を落としました。私はそのときの沖縄の子供たちの写真を見て、衝撃を受けました。とても細くて小さくて悲しそうな顔をしていました。その子供たちはほとんどが栄養失調で亡くなってしまったそうです。今では考えられないことが本当にあったのだと目の当たりにしました。また、調べていくうちに、北谷という町から米軍は上陸したと分かったのですが、今回の全国大会に沖縄代表として北谷の中学校が出場していました。もしかしたら北谷の選

手のおじいちゃん、おばあちゃんや、ひいおじいちゃんが兵士として出ていたかもしれないし、亡くなってしまったかもしれない。同じ中学生なのに、私には考えられないようなつらい思いもしてきたんだろうな、と考えると、胸がいっぱいになりました。私は今、後悔していることがあります。それは、曾祖母から戦争のときの話を聞かなかったことです。曾祖母は戦争中、5人の子供を守りながら必死に逃げたとききましたが、それ以外は私は知りません。もっと曾祖母から聞いていれば私自身も戦争の悲惨さを伝えていくことができたと後悔しています。

私は今回、悲しい戦争がおこった沖縄でこうやってバスケットボールができる幸せを感じました。沖縄はにぎやかで明るい元気な街になっていました。しかし、過去に戦争がおこっていたということを忘れてはいけないと思うし、二度とおこしてはいけません。今も世界のどこかで戦争に苦しんでいる人がいます。その人々のために、平和に幸せに生きている私たちができることは何か、平和とは何か、よく考えていくことが、戦争を二度とおこさないための鍵になると、私は思います。

“終わり”がくる日まで

市立高校中等部

3年

齋藤 汐里

私は戦争を知りません。授業で習うことだけではなく、今もなお苦しんで生活している人々がいることを考えたことはありませんでした。戦争が起きた歴史的な理由などは調べれば出てきますが、私は実際に戦争を経験した曾祖母に話を聞き、涙を流しながら話してくれたことを伝えたいと思います。

曾祖母は1935年生まれで、現在は82歳です。終戦の時にはたった10歳でした。曾祖母は東京出身で、106回の空襲を受けた東京大空襲を経験しています。B29が頭上を通過し、離れたところで丸い筒のようなものが降ってくるのを見たこともあったそうです。その後、学童疎開で家族と離れ姉と二人、福島県の須賀川へ行きました。しかし姉と別々の疎開先で、心細い思いをし不安な日々を過ごしたようです。

疎開先でも食べるものが少なく、水も薬を飲むときしかもらえず、のどが乾いた友達はどうそをついて水をもらったそうです。夜、曾祖母が薬を飲むための水をとりに行くのと、自分より少し小さい子がおひつに入ったご飯を手づかみで盗み食いしているのが見えました。自分もお腹がすいていたけれど、水がもらえるだけ他の子よりましだと思い、告げ口をせず心の中にとどめておくことにしました。他にも隣の子の朝食のパンがなくなり、自分が盗んだと責められたり、自分に送られてきた食べものや荷物を自分だけでなく他の

子に勝手にわけられたりと、嫌な思いをすることがたくさんあったようです。その後、疎開先が本家のある新潟に移り、身重の母と姉と妹と四人で生活するようになりました。

その頃、父とおじは兵隊として戦争に駆り出されており「山崎（曾祖母の旧姓）の人が死んだ。」と連絡があり、父が死んだと悲しみ泣き叫びました。しかし亡くなったのは父でもおじでもなく、別の方でした。父が疎開先に来たときは、他の兵隊さんに混じり足をひきずりながら家族のもとへ向かって歩いてくる姿をみて、本当に生きていたと家族で涙を流して喜びました。

終戦間際、末の妹が生まれました。日本が戦争に勝つように「勝子」と名付けられました。天皇のラジオ放送で日本が負けたと知ったとき、日本が負けると思っていたなかった曾祖母はとても驚いたそうです。しかし、もう家族が離れ離れになることや、つらい思いをすることもなくなっていくと思うとほっとした気持ちもあったそうです。

終戦後、家を建て直すため焼け崩れた家から色々なものを集めて再利用したり、防空ごうに隠していたものを使おうとしたら、防空ごうも崩れていて家族の写真やお米など、ボロボロになり使えないものがほとんどで、利用できないものもありました。

曾祖母は今、肺炎にかかり退院したばかりにも関わらず、つらい体験を話してくれました。普段はとても優しくて頼もしい曾祖母が涙を流す姿を初めて見て、私も涙が出そうでした。大人になり、生きていく中でつらいこともたくさんあったけど、戦争を体験してきたから耐えて明るくいられると言っていました。話してくれた後、

「あんたが聞きにきてくれて、死ぬまでに話せてよかった。ありがとう。」と言ってくれました。この言葉が私の中でずっと残り、やはり考えているだけではだめだと思いました。社会の授業で積極的にコミュニケーションをとり、思いを言葉にして伝えることで、戦争を経験した人の意志が受け継がれるのだと思います。

私に平和は語れない

市立高校中等部

3年

鈴木 真優子

「ひろしまのピカ」「白旗の少女」「貞子の折鶴」「火垂るの墓」絵本に始まり物語まで多くの本を読んできました。その本の中に書かれている戦争の悲惨さ・酷さ・辛さ・悲しさそして愚かさに涙し、戦争というものがどれほどあってはならないことであるかを感じました。しかし事実を言えば、私は

話の中での戦争というものしか知らないのです。病気になって初めて健康のありがたさを実感できるのと同じで、人は身を持って体験しなければ真実は理解できないものだと思うのです。

私の大好きな祖父は、静岡市の山奥で生まれ、小学校一年生の時に満蒙開拓団に入殖する親や親戚の人達とその当時の中国に渡り、農作業等に従事していたそうです。そして、終戦の引揚時に10才の祖父は1才の甥を背中にくくりつけ途方もない距離をただひたすら歩いて日本に戻ってきたのだということです。今は75才になる甥のおじさんは事あるごとに「隆兄が頑張っ
て背負ってくれていなかったら、俺は生きていなかった。」と話します。私は、もう残り少ない体験者の話を直に耳にできる人間です。しかし、無口な祖父は辛かった話はしないのです。広大な中国の冬の寒さ、一面の綿畑の美しさとか、そんな話が多いのです。人はあまりに辛い体験をすると、その辛い話はできなくなるものなのかもしれません。知り合いのおばさんの父親は、兵士として東南アジアの島々を転戦したそうです。戦友の話や現地住民との交流、上官にほめられた話のくり返しばかりで、おばさんは「父は戦争で酷い目に合わずに済んだのだ。」と子供心に勝手に思い込んでいたそうです。85才を過ぎて父親は、虫メガネで世界地図を見ては、東南アジアの島々を指でたどりながらポツポツと話し始めたそうです。歩けない友を置き去りにした話、配給品を紛失して上官に殴られる辛さに便所で口に銃をくわえて足の指で引金を引いて自殺した戦友の話。身近な人が本当の辛さを語った時、体験をしてもいないものが安易に平和や戦争について口にはできないと痛感したとおばさんは話してくれました。

私の祖父は、甘やかされている今の私をただ笑って見えています。雨が降れば母に送り迎え、食べたい物欲しい物は手に入れ、我がままも可愛いと受け入れてもらっている私です。「辛い思い、空腹の酷さ、いつ死ぬかわからない不安と戦うことも話さずに、祖父は恵まれて笑って暮らす私を見つめています。本当に過酷な体験をした人は、人の幸せをうらやまないし妬まない。」「ご飯が食べられ、家族と暮らせて、明日が来る生活が送れ未来を夢見る事ができて、本当に良かったね。」と言うのです。体験者は、唯一人として、自分が味わった同じ苦しみを人に味わわせてはならないと心の底から思っているのです。祖父は、明るく元気に笑って暮らす私の日常がかけがえない尊いものだと知りすぎているから、何も言わないものだと思うのです。

私に平和は語れません。でも戦争程愚かなことはないという真実だけは知っています。体験はしていない、本で学んだことだけが全てです。終戦の日
は、「空を見上げながら、もう死ななくていいんだと思ったなあ。」と笑う祖父の顔が真実だと思うのです。この秋の修学旅行で私達は広島原爆ドーム

を訪れます。より戦争の残酷さを目のあたりにし、私の今ある幸福がどれ程かけがえのないものであるか平和への想いを強くし家族はもちろん、私に関わってくれるすべての人々への感謝の気持ちでいっぱいになるはずです。

私に平和は語れません。でも平和を目指す一員にはなれるはずです。真実を学び平和をかかげる事を大切に生きる人になりたい。平和とは、戦いがなく世の中が穏やかであること、争っていたものが仲直りすること。和は元々日本の名前です。「平和」というこの言葉だけではなくしません。なにがあっても...

平和ってなに？

戸田中学校

3年

齋藤 いぶき

平和ってなに？

あなたはどう答えますか？

人が死なないこと？

戦争が起こらないこと？

みんなが仲良くしてること？

そんなのありません

どこかで人が亡くなり

どこかで内戦やテロが起こり

どこかでけんかをしている

平和ってなに？

祖父に聞いてみました

「毎日ご飯たべれて、だれかと話せて笑って過せることだな。」

祖父は八十四歳です

私と同じ歳で戦争を経験した祖父には

普通の日々

そう

あたりまえが平和でした

平和ってなに？

自分もあたりまえが平和だと思いました

あたりまえって

ごはんが食べれて

友達と話せて

笑えて泣けておこれる

もしあたりまえが無くなったら
これがなによりも辛い事になるでしょう
ごはんも食べれず
友達と話せず
笑いも泣けも怒れもしない
これだけじゃないと思います

でも世界のどこかには
あたりまえを失ってしまった人はいる
その人達のためにも
その人達の事を少しでも考え
少しでもできる事を少しずつする
これを多くの人がすれば
人々のあたりまえが戻るかもしれない

すこしでも多くの人が
あたりまえに過せるように
あたりまえに生きれるように
私は考え行動したい
